

---

# **そよ風に歌声を乗せて**

おにぎり（鮭）

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

そよ風に歌声を乗せて

### 【NZコード】

N5346X

### 【作者名】

おにぎり（鮭）

### 【あらすじ】

歌田音アパートに一人暮らしをする、天川駿。

ゲームが大好きでゲームばかりやっていた高校入学式の三日前、ジュークを買いに出かけた先でたまたま、隣の部屋に引っ越して来る途中だった初音ミクに出会う。

ミクとの出会いをきっかけに駿と駿の周りの環境が少しづつ変わって、彼は成長していく。

この小説は処女作であると同時にボカロに対する「こんなだつたらいいな」と言つ作者の勝手な妄想で構成されたものですので、ダメな方は戻るを押して下さい。

それでもOKな方はどうぞ生暖かい田で読んでやってください。

## 登場人物紹介？（前書き）

初めての連載小説投稿です。

更新はプライベートの用事（学校等）や気分でかなりの不定期更新になると思います：

駄文の上に、自分の「ボカロがこんなだつたら」的な妄想氣味の設定があるので、それでもOKな人は生暖かい目で見守ってください。

ちなみに最初は主要メンバー一人の紹介です。

## 登場人物紹介？

とりあえず登場人物紹介。（後で変更する可能性あり。できれば避けたい。）ちなみに年齢は初登場時

天川 駿  
あまのがわ しゅん

15才 高校一年生

好きな物 ゲーム、一人でいること

嫌いな物 うるさい所（学校等） 面倒なこと

歌田音アパートに住む高校生。

母親を幼くして病氣で失う。父親は一応いるが、単身赴任のため基本一人暮らしをしている。

ゲーム好きで暇さえあればゲームのことを考える。人付き合いはあまり得意でなく、一人でいることが多い。

面倒くさがりで基本的に何か頼まれると「面倒くさい」と断つてしまふ。だが、困つてそうな人には「面倒くさい」といつつ、手助けをする優しい一面も。

本当は友達がもっと欲しいが、うまくコミュニケーション出来ないため、友達はごくわずか。

初音ミク（はつねみく）

15才 高校一年生

好きな物 ネギ、歌うこと、明るい雰囲気

嫌いな物 虫、怖い物、一人ぼっち

駿の住むアパートの隣の部屋に引っ越して来た少女。腰まである緑色の髪をツインテールにしている。

性格は明るく、たまに天然。歌うこととネギが大好きで、暇な時は鼻歌を歌い、朝、昼、晩に必ずネギを食べる。おやつもネギの時がある。

駿の性格を知つてか知らずか、冷たくあしらわれても笑顔で接し続ける。

事情があるのか一人暮らしをしているが、一人でいることが苦手なようで、駿の部屋に押しかけてくる時がある。

結構泣きやすかつたり、それでもなかつたり。

性格や見た目の可愛さからクラスの人気物で、男子からはかなりの人気を得ている。

## 登場人物紹介？（後書き）

読みにくくてすいません…

まだ二人しか紹介していませんが、ほかのメンバーもちょくちょく紹介したいと思います。

ちなみに作者にネーミングセンスなんてものは存在ないです。  
その辺は勘弁してください…

## 第1話　春休みの出来事（前書き）

ひとつあえず、一話です。

誤字、脱字には気を払いましたが、あるかも知れないので、あつたらコメントしてください。

ちなみにタイトルとかは適当に決めました。パツと思い浮かんだのをそのまま打ち込んでます。なのでタイトルと内容が一致しない可能性大です。すいません…

## 第1話 春休みの出会い

4月5日、歌田音アパートの105号室で俺、天川 駿はアクションゲームをプレイしていた。

「よしつ、後ちょっとで…」

『ぐわああ…』

テレビ画面から主人公の絶叫が聞こえる。

「なんだよーー」のつー

後少しで敵ボスが倒せそうだったが、一瞬の隙を突かれやられてしまつた。

「はあ……なんか喉渴いたな。ジュース飲むか」

かなり集中していたためか、俺は喉が渴いていた。テレビがあるリビングを抜け、キッチンの冷蔵庫に向かう。

「あ、ジュース切れてるわ。なんだよ…ったく…」

冷蔵庫を閉め、その場で少し考える。喉の渴きを潤すだけなら水道水でよいのだが、それは嫌だつた。かと言つて外に買いに行くのも面倒だつた。

「うーん……たまには外に出るか

結局外に買いに行くことにした俺は、部屋の戸締まりをして、財布、携帯、家の鍵を持って玄関に向かった。

玄関の鍵を閉め、アパートから出ようとした時、アパートの前で誰かを待っているのか、しきりに道路を覗く大家さんがいた。声をかけて立ち話をさせられるのは嫌なので、気づかれないように出ようとしたが…

「あつ、駿ぐん、しゅんぐん」

見つかった。

「はあ…」

溜め息をついて振り返り

といいながら振り向く。

「なんすか？」

「今忙しいんすけど」

そういつてなんとか逃げようとしたが

「はつはつは、相変わらずつれないねえ」

と笑いながら大家さんが笑いながら近づいて来る。

(人の話聞けよ、おい…)

俺の住んでる歌田音アパートの大家さん。50代のオッサンで名前なんて覚える気がなかつたから、なんて名前なのかは知らない。「大家さん」としか呼んでないけどそれでいいと思う。面倒くさいし。オッサンと呼ぶよりはいいだろ。

「いやあ、実は今日新しい入居者が来るはずなんだけど、予定の時間になつても来ないんだよねえ」

大家さんが困つたようにこちらを見ながら言つ。

「や！」でさ……」

言いかける大家さんを遮つて

「人探しなんてやりませんよ。面倒くさいし、俺はジュース買いに行くだけですから」

と拒否した。

「そんなつれないこと言わないで……つておー一話はまだ……」

これ以上相手をしていたら確實に人探しをさせられる。そんなのはごめんなので、大家さんを無視してさつさとジュースを買いに行つた。

「で……故障中かよ……」

最寄の自販機までジュークを買いに行つたのはいいが、あいにく  
自販機は故障中だった。

(今帰つたら大家のオッサンに捕まるよな……)

やう思ひ

「面倒くさいにさほど散歩がてら自販機探すか」

と独り言を言つて、俺はアパートとは反対方向に歩きだした。

どのくらい歩いていたるうか、さすがに引っ越して来て一ヶ月しか  
経っていないのでは、どこに自販機があるか、わからない。ある程  
度の道は覚えたものの、自販機の配置まではさすがに覚えられなか  
つた。面倒くさいし。

しばらく歩き続け、なんとか自販機を見つけることができ、迷わ  
ずスポーツドリンクを買って、一口飲んだのはいいが

「うえへ、甘すぎだる。これ……」

普段よつと多く歩いたせいで、汗もかいいていた。だからだろうが、  
いつもの倍は甘く感じ、とても飲む気にはなれなかつた。

(スポーツドリンクなくて、お茶にすりや良かつたな)

そんなことを考えていると、そよ風が吹いた。

春らしき、気持ちのいいそよ風だった。

(たまにほ、散歩も悪くない、か)

そんなことを考えながら、ぼーっとしてると、風に乗って歌が聞こえてきた。

歌の聞こえる方向に歩いて行くと、小さな公園があり、いくつかあるベンチの一つに緑色のシンテールの髪の女の子が座りながら歌っていた。

(声、綺麗だな…)

思わず聞き入ってしまったことに気づいた俺は、緑色の髪の女の子に気づかれないうちに立ち去りつとした。だがその瞬間、バツチリ女の子と田代が合ひてしまった。

(あ…田代が合ひやった…とつあえず返まずこし、無視しよう)

そう思い、無視して帰ろうとしたのだが…

「すいませ～ん」

呼び止められた。なんか今日は障害をやり過ごせなー。呪いか?

「なんすか?」

ぶつかりつつに返事を返す。

「あの…私田代の町のアパートに引っ越しして来たんですけど、その道に…迷っちゃって…ビルに行けばいいか…」

「地図使えば？」

最もなことを言つてみる。

「地図を見ても、自分がどこにいるかわからなくて……」

(…ここに、地図読めねえのか?)

「で、俺が通り掛かつたから声をかけて来たと。」

思つたことは口に出さず、質問した。

「はい…」

女の子は申し訳なさそうに下を向いて答えた。

(ん? そついや大家のオッサン、今日新しい入居者が来るつて言つてたつけ。聞くだけ聞いてみるか。もしやつなら、オッサンの待ち伏せ喰らつても、人探ししなくていいし)

「おい、そのアパートの名前、覚えてるか?」

やう聞くと女の子は

「えへつと…うた…うた…うたなんとかアパートです」

(…自分の引っ越し先の名前くらい覚えるよ…)

内心女子にシッコミながら

「それ、歌田音アパートじゃないのか？」

と記述してやる。

「そうだ！歌田音アパートです」

「ビンゴだ。これで大家のオッサンにパシリにされずに済むわ。  
思わずガツツポーズを小さく決めていたようだ、それを見た女子に

「どうしたんですか？」

と聞かれてしまった。

「いっ、いや、俺も歌田音アパートに住んでるからさ、これで大家  
さんにパシラ……じゃなくって近所が賑やかになるなって……あは、  
はは」

（…全然じまかせてねえよな。これ…）

と、女の子のリアクションにびっくりしてた俺だったが、

「あっ、ほんとですか！？いや～運がいいなあ、同じアパートの人  
に会えるなんて」

と全く「まかそと」としたことに気づいていない様子だったので、  
少し安心した。

「あっ、そうだ」

やうこいつと女の子は「ひか」を向き

「今日から歌田音アパートの104号室に住む、初音ミクです。よ  
ろしくね」

と自己紹介をされた。が、俺は自己紹介なんて面倒でやりたくない  
いので

「へいじゅく」

とだけ返し

「じゃあ案内してやるから」

と言つてアパートに向かつて歩きだした。

「えつ、ちゅつ…待つてよ~」

その後を初音と名乗った女の子が追いかけて来る。

「これが、ミクとの初めての出会いだった。」

## 第1話　春休みの出来事（後書き）

疲れた…

携帯で投稿は効率が悪い…

ある程度は編集して読みやすくなるようにはしたつもりですが…  
やっぱり読みにくいかも…

結構グダグダな内容になつた気がします。

何か感想等あつましたら、よろしくお願いします。

## 第2話 春休みの出会い？（前書き）

テスト終わったあー（二つの意味で）

第2話です。相変わらずグダグダです。

## 第2話 春休みの出会い？

「ねえー、待つてつばー」

私はそういうてさつき偶然出会った引越し先のアパートの住人だ  
という男の子を追いかけた。でも男の子は早足で歩いていてしま  
う。だから私は男の子との距離が離れるたびに小走りで追いつこう  
としていた。

「名前くらい教えてよー」

そう聞いてみるもの

「・・・・・・・・・・・・

男の子は全く口を開いてくれなかつた。

「」の人に会うままで、私は道に迷つて公園で途方にくれていた。地  
図を見ても自分がどこにいるか分からないし、近くに誰も人がいな  
かつたからどうしようもなかつたからなんとなく歌を歌つていた。  
そしたら、視界の端に人影が見えて、そっちをみたら男の子と目  
が合つた。

男の子は慌てて立ち去ろうとしたけど、思い切つて声をかけてみ  
た。事情を話したら、その男の子が引越し先のアパートに住んでい  
ると言つた。

(やつた！これでやつとアパートにたどり着けるー)

そう思つて男の子の後を付いていつてる訳だ。

じぱり歩くと、遠くから人の声が聞こえた

「おーい、駿ぐん。見つけてくれたかーい？」

「どうやら、私は探されていたみたいだつた。

（え？ じゃあこの人は私を探してくれてたの？）

「誰も大家さんの手伝いをするなんて、言つてませんけど？」

とわざわざの顔の上に向かつて言つた。

「でも、後ろにさりゃんといるじゃないか。素直じゃないねえ～」

と大家さんが笑う。

「別に。ジュース買いに行つたらまたま会つただけです。じゃあ、俺、部屋に戻るんで」

やうこいつで、さりげと野の子は自分の部屋に戻つてしまつた。

「いみんな～冷たい態度で。あいつ、悪いやつじゃなこと思つんだけどね～」

と部屋に戻つていいく男の子をみながら大家さんに謝られた。

「あ、いえ・・・そんなことないです。それに私の方こそすいませんでした。道に迷っちゃって・・・」心配おかげしました。」

慌てて私も謝る。

「いやいや、いいんだよ。えーっと、初音ミクさん、でいいんだよね?」

そう大家さんに名前を聞かれたので

「はい、今日からお世話になります。初音ミクです」

と返事をして、私は頭を下げた。

「お、お、そんなんに硬くならなくていいよ。まだうちも建てたばかりのアパートだから、入居者がほとんどいないくてねえ。今居る入居者は君を含めて、さつきの子しかいないんだ。」

「そうなんですか…」

私は先程の男の子のことを思い出す。

「あの子も引っ越しして來たばかりでね、友達もいないみたいだから、まあ仲良くしてやつてくれ」

そう言って大家さんはまた笑つた。

「あ、初音さん。荷物とかはもう全部届いて部屋に入れてあるか

ら、後は自分でうまくやつてくれよ。あたしゃ 101 号室にいるから、用があったら呼んでくれ。じゃあ」

そう言って大家さんも自分の部屋に戻つていった。

(… 今日から… が私の家か…)

そう思いながらアパートを見上げる。

(荷物の整理、終わつたらあの子に挨拶しに行ひつ)

私も、新しい我が家に向かつて歩き出した。

・

なんとか大家のオッサンをやり過げし、自分の部屋に帰つて來た。  
さつき買つたスプドリは、ずっと握つてたせいで、もうぬるくなつ  
ていた。

一口だけ飲むと、すぐに冷蔵庫にしまい寝室に向かつた。  
久しぶりに外に出て、疲れたので昼寝することにした。

(今は… 一時半か…)

時計を確認し、そのままベッドに倒れこんで、眠つてしまつた。

…どのくらい眠つていたのだろうか。不意に目が覚めたので、  
時計を見る。

(五時半…かなり眠ったな…)

もう思ひながら、またつとつとし始めた時

ピンポン…

インターホンがなつた。

「はーい。今行きます」

そう言つて玄関のドアを開けると、新しい隣人のあの子が立つて  
いた。

「あの…一応挨拶した方がいいと思つて…」

と、少しぐれを向きながらその子が言つた。

「ああ…わざわざやんな面倒なことしなくていいんだがな」

俺はそつとて、ドアを閉めよつとした時

「あー、あのー」

「なんだよ…」

女の子は慌てて呼び止めたので、閉めよつとしたドアを止め  
た。

「あの…せめて名前を教えてくれない…かな?」

(またその質問か…)

さつき歩こてこむ時は、面倒くわこて答へなかつたが、まあこれから先も顔を合わせそうなので、

「天川 駿」

とだけ答えた。

「じゃあ、駿君これからよろしくねー私のことはミクって呼んでくれればいいから」

（なんだコイツー？俺のここと苗字じゃなくていきなり名前で呼びやがつた。馴れ馴れしい奴だな…）

そう思つたが、口にはださず

「ひづりひづりよろしく。初音さん」

とだけ返しておいた。

「ミクでいいつじよ。それよつそろそろ夕飯だよね？挨拶も兼ねて、大家さんの所で皿で食べようと思つんだけど、一緒に食べよつと

とこきなつミクが誘つて來た。

「…別にいいけど

断つてもなんか粘られそつなので、とつあえずOKしておいた。

「ほんとー、じゃあ六時に大家さんの部屋でー。」

「えつ……あ、おーー。」

止める暇もなく、ミクは自分の部屋に飛び込んで行つた。

「面倒くせこなあ……まあ、しょ‘つがないか…」

そう呟き、とうとうシャワーを浴びて着替へよつと、風呚に向かつた。

(…なんか、面倒な奴が隣に引っ越して來たな…)

そう思いながら、大家さんの部屋に行く準備を進めていった。

## 第2話 春休みの出金こー？（後書き）

とつあえず第2話ですが、なんか思ひつけに書けません。

相変わらずグダグダな駄文ですが、とりあえず下手くそながらも頑張つて更新していきたいと思います。

### 第3話 入学式にて（前書き）

ちよつと更新遅れました。

相変わらずのじ都合主義な駄文です。

### 第3話 入学式にて

ルルルルル  
ルルルルル

田覚まし時計が起床時刻を知らせる。

「ん~…」

まだ眠いが、起き上がつて田覚まし時計を止める。

「あ~…今日は入学式か…」

4月8日、今日は俺がこれから3年間通う有賀島高校の入学式がある。  
あつがしま

(初音さんとは、8時に合流だつたな)

集合時間を確認し、3日前のことを思い出す。

「それじゃあ、ミクちゃんの引っ越し祝つて、かんぱーい！」

大家さんがビールを注いだコップを掲げる。

(二人の人…もう酔っ払つてゐるぞ…)

そんな酔っぱらつた大家のオッサンと俺、ミクの三人でちやぶ台

を囲んでいたのだが、そのちやぶ台の上にまだネギが三のまつ元盤  
られた丼が3つ置かれていた。

(あらえんだる……絶対このネギ多過だわ)

開始早々酔っ払っているオッサンもありえないが、このネギまみ  
れの飯も俺にとつてはありえなかつた。

(今日、ちやんと歯を磨かないと明日ネギ臭くなつそうだ…)

ちやんそんことは作ってくれたミクの前では口が裂けても言  
えないの

「いただきまーす」

と言つて、ありえない量のネギが乗つた飯を食いはじめた。

(…予想外にうまいぞ)

ネギだらけな見た田から、とんでもない味がするものと思つていた  
が、食べてみると意外にもうまかつた。

「今日はちよつと張り切つて作ったんだ。美味しい?」ミクが笑顔  
を見せながら質問する。

「ああ、うまいよ

と、俺は返事をすると

「ほんとー? もしお口に合わなかつたらどうしようかとかちょっと不安だつたけどよかつた」

ミクは嬉しそうに言つて自分もネギ丼を食べ始めた。

(……ちよつと待て。コマイシ食つのは早くないか?)

俺がそういう風うのも無理はなかつた。井からあふれそうなまで盛つてあつたじ飯が、5分もからないうちにほとんどなくなつていたからだ。

(俺だつてこれ食つのに10分はかかるのに…)

唚然とする俺をよそに完食したミクは

「あ~美味しかつた。やっぱりネギは最高だなー」と満足げに言つて

「あ、ねえ駿君。もしよかつたら入学式の日一緒に学校行かない?」

とまたもや笑顔を見せながら誘つてくるのド

「別にいいけど」

と適当に返事を返しておいた。

そこに大家のオッサンが

「お~? なんだ駿君もてもんじゃないかあ~」

と酒臭い息を撒き散らしながら絡んできた。

「大家さん、酔つてるなんらかの酔い覚ましてあげましょつか？」

「うう俺が言うと

「おお、おつかないねえ～ひっく」

とふりふりと両手を上げて降参のポーズをとった。

(この人、酒に弱いくせにたくさん飲むからなあ…)

そんな俺の心配をよそに

「お～し、今日はと」とお飲んで騒ぐや。//クちゃんも飲むかい？」

とこつて大家のオッサンがミクに酒を渡そうとしたので

「未成年者に酒のませようとしてんじゃねえーー！」

と、叫びながら酒を没収しようとした俺だったが

「あ～、駿君も飲みたいよなあ。ひっく」

とカウンター気味に酒を口に流し込まれてしまった。

(うえつ、気持ちわるつ)

決して少ないとは言えない量の酒を飲みこんでしまったので、一  
気に酔つてしまい意識が遠くなつていった。

「あつ、駿君！大丈夫！？」

遠のく意識の中、ミクの慌てた声と酔っ払っているオッサンの声がうつすらと聞こえた。

(もう一度とあそこで飯を食つたりするもんか)

3日前を思い出し、顔をしかめる。

(今は…7時40分か…集合時間には間に合ひな)

時計を確認して、準備を進めていく。

真新しい高校の制服を着て、部屋の戸締まりを確認し玄関に向かう。

家には誰もいながら  
「行つてきます」

と言つて部屋を出た。

(…遅い。もう10分も遅刻してつぞ)

早めに家を出てきたのはいいのだが、肝心のミクが集合時間の8時を過ぎても来ないので、俺はイライラしていた。

(もう置いて行くか)

遅れてくる奴のためにいつまでも待ちぼつかを食らって我慢できる俺では無いので、学校に向かって歩こうとした時

「「めーんー寝坊しちゃったー！」

と後ろからミクの声が聞こえた。

(入学式から寝坊はねえだろ…)

そう思つたが口にはださなかつた。

「ねえねえ、今日つて何時までに学校行けばいいんだっけ？」

ミクが俺に質問する。

「知らん。大体9時とかその辺だろ」

俺はそつけない返事を返す。

「そつか。ヒーリング…」

そこから学校に着くまでミクに質問攻めされ続けたが、面倒なので全部適当に返事をした。

学校に着き、昇降口に張り出されたクラス分けの紙を見る。

(…俺は3組か)

3組の名簿に自分の名前がある」とを確認し、教室に向かつ。

(学校なんてどうでもいいんだがなあ…早く帰りてえ )

そんなことを考えながら歩いていくと、ミクがいない事に気がついた。  
が

(まあ、違うせ別のクラスだろっし俺がいなくとも大丈夫だら)

と思い、気にしないことにした。

教室に着き、自分の席に座る。もう既に半分くらいの生徒が集ま  
つており、知り合い同士の連中は集まって喋っていた。  
特にやるじとも無いので机に突っ伏して寝ていると

「もー、駿君。置いてくなんてひどいよ」

といいハリクの声が聞こえた。

「なんだ、初音さんも同じクラスだったのか

「なんだ、ってリアクション薄いなー。もつと喜びよー。せつか  
く同じクラスになったのに」

「別にいいじゃん」

面倒くねえからさつ返すとミクは頬を膨らませて、隣の席に座った。

そんなことをしているうちに教室に担任が入って来た。

「皆の者、席に着くで！」やるよ

入って来た担任は何故か着物を来て日本刀の様な物を腰にぶら下げた侍みたいな人だった。

「拙者は今日からこの有賀島高校1年3組の担任になるガクポでござる。苗字は秘密で！」やる。では今から今日の日程を連絡するでござるよ」

それから侍まがいの担任から今日の日程、入学式での注意事項を聞き入学式をやる体育館に移動することになった。

「ただいまより、有賀島高等学校の入学式を始めます

教頭らしき人物が司会を務め、入学式は特になんの問題もなく進んでいった。・・・校長の話までは・・・

「私はこの学校の校長を務めます甲趙（こうちょう）です」

校長の名前を聞いた瞬間会場から笑いが起ころ。

（どこ）の笑えない駄洒落だよ・・・校長の名前が甲趙とか・・・くだらないにも程がある）

呆れてふと隣を見ると、必死に笑いをこらえているミクが見えた。

「いいですか、この高校は伝統を重んじる・・・

校長が熱くなつて話しているが、周りの生徒は誰一人として聞いていなかつた。

(校長も災難だな……こんな名前になっちゃって……同情する  
ぜ)

そんなことを考えながら退屈になつた俺は、そのまま寝てしまつた。

「……あるからこの高校の生徒はよい大人になるように努力してほしいと思います。以上で挨拶とさせていただきます」

俺が再び目を覚ました時、ちょうど校長の話が終わつた。

(何分寝てたんだ?)

ふと時計を見ると、時計の針は12時を指していた。

(…………あの校長一時間しゃべつたのかよ…………)

長すぎる校長の話に驚き、呆れると

「以上を持ちまして入学式を終了します

と非常に疲れた様子の教頭が式を閉めた。

式が終わり教室に戻つてみると、侍担任が「今日は皆の者も疲れておるだろうから、詳しいことはまた明日にしてよつ

とすぐに解散にした。

(明日も確か授業ないんだよな。まあさうかと帰るか)

といつあえず今日はもう向もないのとそのまま家に帰らうとしたが

「ねえ、駿君。折角だからちょっと町を歩かない？」

といつの間にか横にいたミクに手を引っ張られていた。

「おっ、おい。俺は家に・・・」

「こーじゅん、早帰りなんだしどつか寄り道して行こうよ。」

と有無を言わひず家とは反対方向に連れて行かれてしまった。

(・・・勘弁してくれよ)

そう思いながらも俺はどこか、嬉しいとも楽しいとも言えそな  
気持ちを抱いていた。

### 第3話 入学式にて（後書き）

担任まさかのガクポ

理由はありません。なんとなくです。

ボカロキャラの性格、口調等は完全に作者の妄想等からなので、「なんか違う」という場面もあるかと思いますが、そこは勘弁して下さい…

## 第4話 初めての書き出し（前書き）

更新が不定期気味になつてきました…

どうも平日は学校で疲れて執筆活動がはからない…

まあ、とりあえづそんな感じで4話です。

## 第4話 初めての町歩き

「うひひひひ～」

そう言つて私は駿君の手を引っ張る。

「そんなに引っ張るなよ。別に急ぎの用じやないんだが?..」

「さうだね!早く行きたいのー。」

「やれやれ…」

呆れたよつに咳く彼を引っ張つて階段を上る。

「着いたあ～」

私達が辿り着いた場所は公園だった。

「…公園?なんでこんな所に来たがるんだ?」

駿君が不思議そうに聞く。

「まあまあ、ちよつとこちへ来てよー。」

そういうつて、私は公園の奥に歩いて行つた。

「お、おーーちよつと待てよー。」

…私が彼を連れて來た場所。そこからは有賀島町を見渡すことができる場所だった。そして、周りには満開になつた桜の花が、そよ風に煽られて綺麗な花吹雪を作つていた。

「どう？綺麗でしょ？」

そうこうして、駿君のほうへ振り返った。

「あ…綺麗だな」

そう返事を返した彼の声は、いつもの中の適当な返事の声ではなく、心からやつ思つている声だった。

（やつぱり、本当は優しい人なんだ…）

桜に見とれている彼を見て、改めてそう感じた。

「ねえ、ベンチに座るわよ。私、階段登つて疲れちゃった」

そう誘つて、私達はベンチに腰を下ろした。そして、今日私がこの場所に来たかつた理由を話し始めた。

「実はね、駿君をここに連れてくるように、大家さんに頼まれてたの」

「え？ 大家さんに？」

驚いたように駿君が返す。

「そう。駿君、引っ越して来てからほとんど家から出てないみたいだから、たまにはこういう場所に来たほうがいいから連れてつてくれって、頼まれたんだ」

それを聞いた駿君は

「余計なお世話だぜ……俺の事なんてほつとあやいいのこ」

と、少しほやいていたけど

「でも、まあいい場所知ったよ。花見には最適だしな」

そういうて、笑顔で返してくれた。

それは、優しくて明るい笑顔だった。

「ふふっ、そうだね。来年は皆で花見にしようか?」

そう私が言つと

「いや、大家さんは省かないと、俺の命が危ない……」

と、三日前を思い出したのか、大家さんと来る」と露骨に嫌そくな顔をした。

「あはははっ！確かに。今度は本当に死んじゃうべからいお酒飲まされそうだしね」

私は思わず吹き出して、笑いながらソリソリ書つたら

「いや、そこは笑つとこりじゃないから」

ヒツツコまれた。

そして二人で

「「…ふっ、あはははっ！」」

思いいつ切り笑つた。

ひとしきり笑つた後、不意に駿君は

「なあ、初音さん。初音さんは桜つて好きか？」

と質問してきた。

「うん…好きだよ。綺麗だし桜の花の色、なんだか可愛い色だから  
や」

「そつか。俺も、好き…かな…」

そう返事した駿君の声には少しだけ悲しみとも寂しさとも取れる  
ものが混ざってたこと、私は気づかなかつた…

「わあ、そろそろ帰るわせ」

そういって駿君は立ち上がつた。

「ええー、まだ行きたい所があるから付きてよ~

「…まだ何か頼まれてるのか?」

と、駿君はだるむつた顔で私のほうを見ながら聞く。

「違うよ。ここは頼まれたからだけど、私が行きたい所は別にある  
の…それにまだお腹食べてないじゃんー私、お腹すいちゃつた」

「…はいはい」

かうひのじいとこった感じの駿君を連れて、私は町への道を歩いていった。

「こひしゃこませー向右様ですか？」

「一ノ右でーす。禁煙席でお願いしまーす」

「かしこまつました」

公園を出た私達は公園の近くにあるフードマレスでお皿を食べることにした。

(ほんとおじいちゃんのお店あったから、そっち行きたかったな…  
ネギ、たくさん食べれそつだつたのに…)

本当に行きたいお店があつたんだけど、駿君が

「飯なんじどりも食つても同じなんだかい、近くで安いフードマレス  
でいいだろ」

と軽ひて聞かないのと、仕方なくフードマレスでお皿を食べねりと  
にした。

「もう決ました?」

フードマレスのメニュー表を見ながら、駿君に聞く

「決まった

「えー? 早くない?」

即答されてしまつたので、思わず聞き返してしまつた。

「別に。いつも頼んでるもの選んでるから」

「あ……そりなんだ…」

「イマイチ良い返事が思いつかなかつたから、とりあえず急いで決めようとしたけど

「別に急いで決めなくともいいからな」

と駿君が言つてくれたので、それに甘えてゆっくつ決める」とひと言した。

・  
・  
・

ミクに公園に連れていかれ、また更に行きたい所があるとか言われた時は正直うんざりした。

（とはいえ、こんな所に連れて来てくれたんだし、もう少し付き合ふか…）

そう思い、ついて行こうと思つたが、さすがに昼飯は近くで安い場所がよかつたので、渋るミクを納得…といつも無理矢理丸め込み、ファミレスに来た。

席に着き、メニュー表を眺めた。

(…こつものマルゲリータでいいか)

一通りメニューを通して、結局いつも頼んでる身のに決めたので、メニュー表を元の場所に戻そうとする

「もう決まった？」

と、まだ何にするか決めかねている感じのミクがメニュー表を見ながら聞いてきたので

「決まった」

と即答すると

「えー…早くない？」

と驚いたように聞き返されたので

「別に。いつも頼んでるもの選んだから」

そう返事をした。

「あ…なんだ…」 いい切り返しが思い浮かばないのか、言葉に詰まつたミクは、再びメニュー表に目を落として

「何にしようかな…ちよつと急がないとな…」

と呟くのが聞こえたので

「別に急いで決めなくてもいいからな

と語りあげた。

( 気を遣わせっぱなしも良くないしなあ )

そんなことを考えながら携帯音楽プレーヤーを取り出して飯が来るまで音楽を聞いて待つこととした。

「お待たせしました、ネギたま丼で～ります」

しばらくして、店員が運んで来たものは、これまたネギがたくさん乗った丼だった。

「は～い～私で～す～」

待ちかねたようミクが手を挙げる。

「…初音さん？」

「ふえ？ なあに？」

「あんた、朝もネギ食つてなかつたか？ なんか隣からす gingerネギの匂いしたんだけど…」

朝、家を出る時ネギの強烈な匂いがしたことと思こ出した聞いてみた。

「あ～…せっぱつ匂い漏れひちゃつてたか～」

(やつぱり？やつぱりだと…「マイツは一体どんなネギ料理をしてたつていうんだ…」)

と失敗したと言わんばかりの表情をするマイクに疑問符だけの俺だつたが

「いやー、今日寝坊しちゃったから急いでネギを焼いてたら、焦がしちゃって…」

(…あれはネギの焦げた匂いか…)

匂いの原因がわかつたのは良いのだが

「なんで一食連続でネギを食べようなんて思つんだよ？飽きないのか？」

(普通ならしないだる、こんなこと。少なくとも俺はやらんぞ)とか考えながら質問してみた。

すると、とんでもない答えが返ってきた。

「え？ 私、一日三食全部に必ずネギは入ってるよ？ 駿君もおんなじ様なことやってるでしょ？」

(その発想はなかつた… ていうかいらなかつた…)

あまりにも奇想天外な答えに、俺は啞然とするしかなかつた。

「あ…いや…やらないだろ…普通…」

かわいじてそれだけ答えた俺は、美味そうにネギたま丼を食べ、「クを理解することを諦め、自分の昼飯を食べることに専念した。

昼飯も食い終わり、一息ついた俺達は洋服店にいた。

「……うわあ……この服、かわいいなあ……」

ファミレスを出ですぐにミクが

「ねえねえ、ちょっと洋服見に行きたいから洋服屋さんに行こうよ~

などと囁こぼじめたので、ついて来たのはよかつたのだが…

(なんか…女ものの服のコーナーにいるの、すげー恥ずかしい…)

こんな所に男が来るなど、デートの時くらいなものだらうが、もちろんそんな経験のない俺は周りからの目線を感じずにはいられず、常に拳動不審な状態だった。

(…初音さん、まだここにいるつもりかな?)

そんなことを考えていると

「ねえねえ、これ可愛いない?」

そう言つてミクが持つて来たのは、ピンク色のスカートだった。

「ああ?どうからどうの辺が可愛いっていうのか、俺にはわからんか

「もう少しでも言ひたい句とも言へねえよ」

今まで女子と遊ぶ」とはおろか、話したことすらまだ知らないので、それは事実である。

「別に基準なんてないよ? 駿君が可憐について思つかどうかを答えてくれればいいから」

「もうミクに言われたが、正直良くわからないので

「どうあえず、着てみれば? そしたら分かるかもしんねーし」と言つてみた。

「えつ……つと……じゃあ着てみる」

そう言つて試着室に入つていったミクの顔が少し赤くなつていた  
気がした。

まあ氣のせいだろ?。

それからやや時間を置いて、ミクが試着室から出て来た

「お待たせーーえつと……じつ?…似合つてゐる…かな?」

上着は制服だったが、スカートは先程ミクが選んだピンク色のスカートに着替えていた。

「あ…可愛…」

言葉を選ぶ前に、思わずそう言ってしまった。

すると、その言葉を聞いたミクの顔がまるまる真っ赤に染まり

「えつ…あの…えつと…あ、ありがと…」

と真っ赤になつた顔でお礼をいったかと思つたら

『びしゃつー』

と試着室のカーテンを閉めてしまつた。

…中からなんかお経みたいなものが聞こえたのはさうじ飯のせいだと思ひ。

・  
・

(結局、衝動買いしちゃつた…)

洋服屋さんで駿君に可愛いと言われて以来、頭の中が真っ白になつて、気がついたらスカートを買つていた。

(もともと、何か買つてもりでお金持つてよかつた…)

そんなことを考えたけど、すぐに頭の中で可愛いと言われたことでいつぱいになる。

「…やん? 初音さん?」

ほーつとしていた私は駿君に呼ばれてこる」といふ流れ、慌てて返事をする

「あっ、はい…えっと…なんでしょうか？」

「なんでしょ、じゃなくて、もう行きたい所はないのか？」  
「えっと…な…ですか…」（やだ…まだいろいろ行きたい所あったのに…）

もう思つたけど

「なら、もう帰らうぜ。俺は疲れた」

そう言つて駿君はアパートに向かつてむかへと歩いてしまつた。

「とにかく初音さん、明日も一緒に学校行くのが…どうでもいいなら、俺は自分のペースで学校行くけど」

アパートに着いて、お互ひの部屋に別れる直前、不意に駿君が聞いてきた。

「えっと…じゃあ、せつかくだから一緒に行こうぜ。」

「了解。じゃあ、また明日」

「うそ。また明日」

もうひとつ、私達は別れた。

（…やういえば、男の子に可愛いつて言われたの、初めてだな…）  
部屋に入つてから、自分で買ったスカートの入つた袋を見て、ほんやりとそんなことを考えた。

(中学の時は、男の子となんて話をなかつたからな…)

中学時代を思つ出すと同時に封印したと思つ出せてもそれを想つに出しそうになつて、頭を抱える。

(嫌…思つ出したちやだめ…)

必死で記憶を押さえ込み、何か氣の紛れそつなことをしようとして書  
えて

(歌、歌おつ…)

そつ思い、大好きな曲のメロトライを口ずさんだ。

歌を歌い終わつて少し氣持ちの和らつだ私は  
「明日からも、がんばりつー！」

そつ眩き、自分を酙づけた。

不安はまだまだたくさんある。でもせつと頑張つてやつて行ける  
気がした。

## 第4話 初めての町歩き（後書き）

今回は少し文章が長くなりました。

相変わらずのぐだぐだな文章ですが…

黄色双子はそれなり出でようかな、と思いつてます。

## 第5話 // クとコン（前編）

第5話です。

いつも通りのぐだぐだな文章です。

それではじめ

## 第5話 // クとコン

「レン。ひょっと待てよ~」

黄色い髪をした中学生の少年が、同じく黄色い髪の頭の上にリボンをつけた少女を追いかける。

「そんなに急いでも仕方ないだろ~」

少年は少女をたしなめるよ~うに囁く。

「何言つてんの。レンは善は急げつてこい」とわざを知らな~いのか?」

レンと呼ばれた少年が反論する。

「じゅあ、レンは急がば回れつてこい」とわざを知らな~いのか?」

レンと呼ばれた少年が反論する。

「とにかく、早めにお家に帰るつよ~。そしたら早く~ってあれ?」

先程まで元気そつた顔をしたレンの表情がみるみる曇つっていく。

「コン~ど~したんだ?」

コンの異変に気づいたレンが聞く

「お財布……落つ~ひきもやった……」

青ざめた顔でコンがそついた。

「駿君ー、一緒に帰りひー。」

ぼんやりとしていた俺は、ミクの声で現実に引き戻された。

「ん？ ああ…ミク。もつてんな時間か」

「どうしたの？ なんかぼーっとしてたけど？」

ミクが心配そうな顔でこちらを覗き込む。

「別に。たいしたことじやない」

変に詮索されたくないの、適当に返事をする。

(昨日やつたゲームのヒロインが可愛いかったなんて口が裂けても  
いえねえよ…)

「ふーん？ まいいいや。早く帰ろ？」

「おー」

入学式から数週間後、高校生活にも大分馴れてきた。友達らしい友達と言えば相変わらずミクぐらいしかいないが、別に問題ないだろ。つ。

大体、友達作りなんて面倒なだけだし。

「ねえ駿君、今日ちょっと公園寄らない？」

昇降口で革靴に履きかえた時、唐突にミクが切り出した。

「ああ？ なんで公園なんて行くんだよ？ 桜はもう散つただろ？」

と俺は聞き返した。

「そうだけど、何となく行きたくなつたから。ビリせ駿君も部活入つてないんだから、放課後は暇でしょ？」

確かに、俺もミクも今のところ部活には所属していないから放課後は暇であるが

(早く家帰つてゲームの続きをやりたいんだよなあ…)

昨日やつていたゲームがいい場面に差し掛かっていることを想つと、早めに家に帰りたかった。

「ん~…でもなあ…」

そう渋るものの

「いいじゅん、いいじゅん！ なんかジュースおひつあげるからさー！」

「う…わかったよ…」

ここまで言われてしまえば断れない。

以前それでも断ろうとしたとき、ミクは泣きそつた顔をされてしまって、慌てた記憶がある。

(あん時は何を頼まれたんだっけ…)

何を頼まれたのか思って出でましたが、わざと並んでここので止めた。

「分かったよ…付き合えばいいんだろ?」

「やったあーじゃあ行こうー。」

何故公園に行くだけでそんなに喜ぶのか、俺には分からなかつたが、あまり気にしてこなことじた。

公園に着くと、思った通りと言つか、当たり前だが、桜の花は全部散っていた。

「やっぱ、散っちゃひるね…桜」

ミクが少し残念そうに言った。

「だから言つたじゃん。何となくだよ?」

「…やうか

(何となくなら連れてくれるなよ…)

と思つがそれは口に出さず、公園の奥に歩いて行くミクの後を追いかけた。

「あれ？今日は他にも誰かいるよ？」

しばりへ公園を歩いていると、突然ミクが立ち止まり、ベンチを指さした。

「そんなん泣くなよ、リン」

ベンチに座っている男女で、男のほうが女を慰めていた。

「えぐつ……だ、だつて……ひつく……財布……落とし……ちやつて……」

「じつやう、一人は双子らしき。見た目がそっくりである。全く同じ服装をされたら見分けがつかないだろう。で、その双子の女の子のほうが泣きじゃくっていた。

「じつしたんだね？なんか困つてゐみたいだけ……」

双子の様子を見たミクが心配そうに彼らを見てから、口ひかりを振り返つて

「ねえ駿君。助けてあげよ、みつよー。」

「駿ぐ～ん！あつた～？」

…、じうじてこいつなつた？

学校帰りに半ば強制的に公園に寄らされて、その公園にいた双子が困ってる様子だったから助けようとかミクが言いはじめた結果、双子の姉の方、『リン』とか言つ奴の財布探しに守り合わされるめになつた。

（財布落とすとか、どんなだけドジなんだ？しかも何故俺まで探さればならんのだ？）

などと愚痴を心の中で囁こながら、とつあえず公園を探してゐるわけだが

「すこません…わざわざ探しでもらって…ひっく…」

まだ半泣きのリンがわざわざ頭を下げまくつてるので

「別にこことよ。めんどくさいから頬を下げまくつて…」  
ところ返事を返して、財布探しを手伝つた。

「あーあつた…！駿ぐ～ん！リンちゃん…あつたよ～。」

じぱり探していると、泥だらけになつたミクが白い財布を手に走ってきた。

「コンちゃん！これだよね？」

ミクに財布を手渡され、リンは財布の中身を確認し

「あー私の財布だ！よかつたあ…」

そうこうで、ようやくベンチに座りこんでしまった。

「すいません…リンの奴が迷惑かけちゃって…わざわざ一緒に探し  
てくれて、本当にありがとうございます！」

座りこんでいるコンの変わりに弟のレンが礼を言ひ。

「別にお礼なんて言わなくていいよ。私達はただ手伝いたかったか  
ら手伝つただけだし。ね？駿君？」

「ん、まあな」

(よくもまあ、人に軽く説教しといて…)

実は

「人助けなんてめんどくさい。俺は帰るぜ」

とミクに言つて帰つてしまつたら

「 もう！駿君！困つてる人は助けてあげなきゃダメなんだよ？それ  
ここで帰つたら、明らかに差別になるよ？」

などと言つはじめる

「あ？ 差別なんて…」

「差別だよーあの子達を助けないで帰るなら、どうして私の時は道案内してくれたの？あの時は道に迷つて困つてた私を助けてくれたじゃんー！」

「そ……それは…」

(まさかまだ覚えてたとは…)

あの時は大家さんにパシられたくなくてミクを連れていつただけなのだが、ミクは俺が親切心で助けたものと勘違いしているらしい。だが、変に弁解すると事態が混乱するだけなので

「分かつたよ…手伝えばいいんだろ？」

と、若干不機嫌になりながらも手伝つことになったのだ。

「ま、リン。ちやんとお礼言えよ」

手伝つきかけを思い出していくとレンがリンをベンチから立たせていふところだった。

そしてコンを俺達の前に連れて来て

「「今日は本当にありがとうございましたー！」」

と一人に礼を言われた。

「どういたしました。コンちやん、もう財布、落とさないようにな

？」

ミクが笑顔でリンに向かって。  
それを見て

(「いつの時のミクの笑顔は、まるで天使だな……）

と思わずにはいられなかつたと同時に、リンがミクの笑顔に微かに  
反応したことに気づいたが

(…いかん。何考えてんだ？俺は？女子の笑顔なんて皆同じじゃな  
いか）

ミクの笑顔に見とれていた自分に気づき、慌ててさつき考えてい  
たことを否定しようとしつゝはすぐ忘れてしまつた。

「…君？駿君？」

心を落ち着かせるのに必死になつていた俺は、呼ばれていたこと  
にやつと気づき

「あ、ああ……なんだ？」

と返事をする

「なんだ、じゃないよ。もう夕方だし、リンちゃん達をお家まで送  
つていい」

「あー…自分の家に帰る…」

「もう一文句を聞いてつづつて来てー！」

「はいはい……」

…最近やたらヒリクに押されっぱなしな気がする。  
迷ひぬいと思えばできるはずなのよ、何故かできない。

(「これが恋とかこうつ奴か?」「いや、そんなわけないか)

否定しつつも、その考えが頭の隅に引っかかるとれなかつた。

(やつりえれば、まだ双子の苗字、聞いてなかつたな)

不意にそんなことを思い出しが、面倒なので気にしない」とひ  
した。

・・・

私が財布を落としたことに気づいた時は本当に死ぬかと思つた。  
体の芯から凍るような感じ。そんな錯覚に襲われた。

(財布の中には、家の鍵とか、昔お姉ちゃんがくれたお守りが入つ  
てたからなあ……)

昔、遊園地でレンやパパとママとまぐれて迷子になつた時、私よ  
つちよつと年上のお姉ちゃんが

「迷子になつたの? 大丈夫! 私があなたのお父さんやお母さんを一  
緒に探してあげる!」

そういうで、一緒に畠を探してくれた。

しばらくして、畠と会ってお姉ちゃんにお礼を言つたら

「私、初音ミクっていうの…これ、私とあなたのお友達の証のお守り！あなたにあげるね！」

そういうで、ピーズでできた指輪をくれて、どこかに走つていつてしまつた。

その時のお守りは今も大切に財布の中にしまつてある。だから財布を落とした時、すぐ焦つた。

でも、たまたま通り掛かつた高校生の一人が一緒に財布を探してくれて、見つけてくれた。

（あの時のお姉ちゃん、元気かな…）

ふとそんな事を考える。  
すると

「なあ、そういうえば君達の名前、苗字は聞いてなかつたよな？なんて言うんだ？」

と、男の人のほうが私達に聞いてきた。

「あつ… そういえば、ちゃんと自己紹介してなかつた。私は鏡音リン。このちは弟のレン…みろしくね！」

元気に自己紹介をすると、高校生の方も自己紹介をしてくれた。

「俺は天川 駿」

「私は初音//ミク…よろしくね…」

初音ミク。その名前を聞いた瞬間、私の体に電撃が走った。

(私は初音//ミクっていつの…)

あの時の記憶がフラッシュバックする

「おねえ…ちやん?」

あの時の人があの前にいる。そのことで頭がいっぱいになり、その一言が精一杯だった。

「ミク? 知り合いか?」

ミクさんも、私の一言で思い出したのか驚いた表情をしていた。

「ねえ、コンちゃん、もしかして私達…」

「うん…昔、遊園地で会ったよ…」

お互いの顔に喜びの表情が浮かぶ

「「久しぶり~!!」「

そういうて、私達は抱き合つた。

「コンちゃん、元気にしてた?」

「うん~ミクお姉ちゃんは?」

「私も元気だつたよ！」

何年前に会つたかもわからない、でも確かにまた会えた。  
こんなに嬉しいことは久しぶりだった。

「お姉ちゃんがくれたお守り、ちゃんと持つてゐるよ。」

やつこつて、財布からお守りを出して見せる。

「まだ持つてくれたんだ……嬉しい！」

(運命つて、やつといつこつといふことを言つのかな?)

再会の喜びを私は噛み締めた。

## 第5話 // クとコン（後書き）

双子登場しました。

ちよつとレン君が影薄いな…

そのうちはレン君主軸の話も書いつと彌こます。

## 登場人物紹介？（前書き）

登場人物紹介その2です。

体調が崩れそうだ…

そろそろ風邪の流行る時期なので、これを読んでくれている皆さん  
も気をつけてください。

## 登場人物紹介？

一度ここで登場人物を紹介し直そうと思います。

天川 駿

(あまのがわ しゅん)

年齢 15才

性別 男

好きなもの

- ・ゲーム
- ・一人でいること
- ・静かなところ
- ・四季を感じさせるもの (例) 桜の花、紅葉

嫌いなもの

- ・騒がしいところ
- (ただし賑やかなのは大丈夫。要するに繁華街や学校での馬鹿騒ぎは嫌いだが、友達同士のパーティーなど、少人数でわいわいやる程度は大丈夫)
- ・虫全般
- ・勉強

性格、その他

基本面倒くさがり。一人が好きで、学校でも基本的に一人でいる。

困ってる人は気分によって助けるなど、気分屋もある。ほとんどの人に対しても冷たい態度をとるが、気を許した相手には優しく接するなど、人見知りが激しい。

鈍感のため、自分が好かれていても中々きづかない。  
ゲームに関してはかなりのもので

「ゲームは遊びじゃねえんだよ！」

と言つ程やり込んでいる。そのため、ある程度の実力がある相手なら、格下でも容赦なく勝とうとする。

人見知りが激しいせいで、友達が少なく本人は

「友達なんてそんなに必要ない」

と言つているものの、自分の気づいていないところでは友達を欲しがっている。

初音 ミク  
(はつねみく)

年齢 15才

性別 女

好きなもの

- ・歌
- ・ネギ

- ・皆で一緒にいること

- ・学校行事

- ・嫌いなもの
- ・虫全般
- ・怖いもの
- ・一人ぼっち
- ・自分が特別扱いされること

#### 性格、その他

性格は底抜けに明るい。

駿とは逆で、一人より誰かと一緒にいることが好きである。また、誰とでも仲良くなるうとするため、大抵の人には男女問わず好感を持たれる。

特に見た目がかわいいため、男子受けはかなり良い。

逆にそれが原因でミクを敵対視する女子も多くいる。

リンとはまるで本当の姉妹の様に接している。

たまに一人でいることが辛くなり、隣の駿の部屋に押しかけることがある。

どうやら過去のトラウマが原因のようだが…

面倒くさがりながらも、自分のわがままなどに付き合ってくれる駿に好意を抱いている。

最も、駿は全く気づいていないが。

ネギが好き。一日三食、必ずネギを食べる。  
また、歌が好きでよく歌っている。

鏡音 リン  
(かがみね りん)

年齢 13才

性別 女

好きなもの

・みかん

・ミク

・体を動かすこと

・ロードローラー

嫌いなもの

・じつとしていること

・暗いところ

・勉強

性格、その他

とにかく動くことが大好きで、頭に付けた大きなリボンが特徴的な活発な中学生。

その活発さ故に、周りが見えなくなつて、トラブルを起こしたり、財布を落とすなどのミスをすることもある。

ミクのことを心から慕つており、お互いに本当の姉妹のような関係でいる。

暴走しやすい所もあるが、あまり気の強くない弟のレンには世話を焼くなど、面倒見のいい面も見せる。

何故かロードローラーを見ると興奮して

「いつか操縦して見たい！」

と言っている。理由は不明。

鏡音  
レン

(かがみね  
れん)

年齢  
13才

性別  
男

好きなもの

- ・ゲーム
- ・バナナ
- ・お菓子
- ・漫画

嫌いなもの

- ・怖いもの
- ・説教
- ・目立つこと

性格、その他

リンの双子の弟。

リンとは違い、どちらかと言えばじっとしている方が好きなタイプで、よく暴走しそうになるリンのストッパーとしての役目を果している。

基本的にしつかりもので、後先考えてから行動しようとす。

しつかりはしているが、ここ一番に弱く、目立つことをする時おどおどしたり、年上の人には萎縮しやすい。

駿に負けず劣らずゲーム好きだが、年の差で駿には勝つことが出来ず、打倒天川を掲げて日々特訓している。

## ガクポ

年齢 26才

性別 男

好きなもの

・茄子

・時代を感じさせるもの

・自然

嫌いなもの

・最新技術

・都市

・撻を破るもの

性格、その他

「ござる」「など」の語尾や、侍を意識させる言動が特徴的な駿とミクのクラス担任。

何故か情報化の進むこの時代に着物を来ていたり、模造刀を腰にさげたりと、端からみればかなりおかしい人。

自然を愛しており、自然破壊をする輩を嫌つたり、都市計画にも反対していたりする。一度は市役所にデモを起こしたんだとか。

ちなみに茄子が大好きで、タッパーに茄子を入れて持ち歩いている。

家には巨大な茄子の置物があり、本人は

『茄子太郎』と読んで大切にしている。

生徒には

「苗字は秘密」

と言っているが、実は苗字は持っていない。

登場人物紹介？（後書き）

思つたより長くなつてしまつた…

基本的にキャラの好きなものは公式に乗つとつてますが、うろ覚え  
なので、ミスがあるかも…

ちなみにガクポの年齢だけは公式を無視して勝手に決めました。す  
いません

## 第6話 // クリスマス

ピンポン

ピンポン

「ああ？ 誰だこんな朝っぱらから？」

5月3日、土曜日。

「ゴールデンウイークに入り惰眠を貪っていた俺をインター ホンのチャイムが眠りを妨げた。

ピンポン

「はいはい、今行きますよ」

ドアを開けるとそこには出掛けのか、女の子らしこ小さなかばんを持つミニクが立っていた。  
それも膨れつ面で。

「もうっ！ 駿君一起きたの遅すぎだよ！」

「お前が早いだけだろ……今何時だと……」

言いかけた俺を遮って

「もう11時半だよ！ 今日はコンサートやん達と遊びに行く約束でしょー！」

「あ？あれ明日じゃなこつけ？」

「え？今日は日曜日でしょ？」

まさかと思い携帯を開いて日付表示を見る。

「…//ク？」

「え、もしかして…」

明らかに焦りの顔になつてこゑ//クに追撃をかける。

「今日は土曜日だ」

「……」

「……」

沈黙が続く。

「「あんなぞーー！」

先に沈黙を破つたのはミクだった。

「全く…こくら楽しみだからって、日付の確認くらこしてくればよ…」

「「あー」あー。でもせつかくだからどうか行くわよ」

「せつかくの意味が分からんんだけど…」

呆れる俺をよんにミクは

「ねえねえ、どう行く?」

と行く気満々になつていた。

だがやつ何日も外出するのは疲れるし面倒なので

「今日くらこは家にこさせり。明日出掛けるんだから、明日帰つて  
切り遊べばいいだろ」

と慌つて部屋に戻りつとしたら

「じゃあ駿君の部屋にお邪魔するね?」

せうこつて勝手に俺の部屋に上がりこんできた。

「なつ……? 誰も入つていいなんて……」

慌てて部屋からミクを追いで出やつとしたら

「ここじゃこ…どうせ隣なんだし、一度駿君の部屋来てみたかった  
し」

(要するに、ただ興味本位で入りたかっただけじゃねえかよ……)

そう思いながら、ミクを追いで出す方法を考えていたが、すっかり居  
座る氣のミクを見ていると

(…もうどうでもここや…)

と思えてきたので

「ちよっと着替えてくるから、ソレで待っててくれ。勝手になんか触つて壊すなよー」

そつと着替つて寝室に入つて着替え始めた。

「ソレが駿君の部屋かあ…」

ソビングにあるソファに腰掛け、私は駿君の部屋を見渡す。

(思つたより綺麗な部屋だな)

正直なところ、もつところ散らかっている部屋だと思つていたから、意外だった。

「ちよっと着替えてくるから、ソレで待つてくれ。勝手になんか触つて壊すなよー」

そつと着替つて、彼は寝室に入つていった。

「さて、テレビでも見よつかな」

テレビを見よつとリモコンを探す。

「あれ? リモコンだれだ?」

私の部屋にはブラウン管の古いテレビしかないけど、駿君の部屋のものは比較的新しいものだったので、リモコンがどんな形をして

いるか分からなかつた。

リモコンらしきものは見つけたもけど、似たような形のものがいくつか並んでいたから、私にはどれがテレビのリモコンか分からなかつた。

「これかな？」

とつあえず、一番近くにあるつモコンを手にとつてボタンを押した。

「あれ・・・点かないな・・・」のボタンかな？

次々にボタンを押してみるものの、テレビは何の反応も示さなかつた。

「ミク？」

「ひやあーーな、なに？」駿君

突然名前を呼ばれて思わず大声を出してしまつた。  
すると

「お前・・・何やつてんだ？」

と呆れた顔で二つ巴を見ながら質問してきた。

「い、いや・・・テレビ見たいんだけど、どれがテレビのつモコン  
か分からなくて・・・」

そう返事をすると、やうに呆れた顔になつて

「ミク……それはテレビのコモコンじゃなくて、部屋の照明のリモコンだ……」

「…………え？」

「え？ ジゃなくて、お前が持ってるそのリモコンは、部屋の電気を点けたり消したりする時のリモコンだ。しかもそれ電池入ってないし……」

またもや沈黙が流れる。私は恥ずかしくて死にたくなった。  
きっと私の顔は今真っ赤になっていると思う。

「テレビのコモコンは、食卓の上に置いてあるよ。ちゃんと周りを見ろ」

そう言われ、食卓に目を向けると確かにそれっぽいリモコンが置いてあった。

「で、何見るんだ？」

駿君がいすに座つてコモコンを操作する。

「別に何を見ようって訳じゃないんだ。駿君来るまで、暇つぶししようと思つて」

「ふうん……」

それ以上話すことなくして、なんだか気まずい雰囲気になってしまった。

「ね、ねえ・・やつぱりどこに・・」

「行かないって言つたる。俺の部屋にはお前が好きそうなものなんて置いてないだろ? から、退屈なら自分の部屋に戻るか、一人でどうかに行つてくれ」

「・・・・・う」

気まずいので、どこかに出掛けねばと思つたがやつぱり断られてしまつた。

(でも・・・一人は嫌だ・・・)

本当は、今日が土曜日だということは知つていた。  
でも今日は思い出したくない昔の時の夢を見て目が覚めて、すぐ嫌な気分でとても一人では過ごしたくなかった。  
だから、曜日を間違えた振りをして駿君の部屋に上がらせてもらつた。

「なあミク」

「なあに?」

テレビを見ながら駿君が私を呼んだ。

「お前、彼氏とかはいないのか?」

「えつ・・・・い、いや・・私はいないよ?」

突然すぎる、しかも絶対に聞かないだろ? と思っていた人の口か

らってきた質問に頭が真っ白になる。

「じゃあ好きな人は？」

「え・・そ、それは・・・」

どうして彼はこんな質問をするのだろう？動搖でほとんど動かない頭を動かして必死に考えを巡らせる。

「どっちにしろ、そういう人がいるなら自分の部屋に戻つとけよ。流石に見られないとは思うけど、もしそういう人に俺の部屋からミクが出てくるといひなんて見られたら、誤解されるぞ？」

彼の質問した理由がようやく分かつた。あの質問は駿君なりに気を利かせたつもりなんだと思う。

「す、好きな人なんていないよ・・・？」

自分の気持ちを悟られないように、できる限り自然に返事をした。

「ふーん? ならいいけど」

そういって駿君はまたテレビを見ることに専念した。

(好きな人・・・か。目の前にいるのにな・・・)

伝えたい、でもまだ伝えるまでの勇気がない。それに、まだ漠然とした気持ちだから本当に好きなのかも分からない。

そんな自分が少し嫌になり、そつと溜息をついた。

それからしばらくなんとなく駿君と一緒にテレビを見て、お皿ご飯と一緒に食べて、一緒に最近のこととかを話したりして時間を過ごした。

「でね、その猫、私のほうに寄ってきて体を擦りつけてきたの……。もつす」ぐく可愛くてわー。」

「ああ……やつこう猫は確かに可愛いな」

「でしょ？ 犬も可愛いけど、私は猫派かな～」

「犬舐めんなよお前。犬だつてめっちゃじやれて来ると可愛いぞー。」

「だつて犬は顔とか舐めてくるからさ……ちょっと苦手っていうか……」

「なるほど……」

自分でもこんなに男の子と喋るなんて初めてだと思った。  
それに、駿君と意外にも共通の話題があることに驚いたし、同時に  
なんだか嬉しかった。

「ねえ、そういうえば駿君は彼女とか好きな人つているの？」

さつきの質問を今度は私がしてみた。

「あ？ いるわけねえだろ。めんどくさいし、そもそもいらないし」

「そつか…」

彼女なんていらない。その一言が、少しだけ心に刺さった。

「そういうえば俺も聞きたいことあるんだけど？」

「えつ…何？」

今度は何を聞かれるのかと、少し不安になつたので

「す、スリーサイズと体重は教えないからねー！」

と先手を打つておいた。

「人を変態みたいな風に言うな。大体そんなの聞いてなんの得になるんだ？」

「え？ 気にならないの？」

「聞いても分からんし、興味ない。つーか話そらすな」

少しイラッとしたように駿君が言つたので

「『めん』めん。で、聞きたいことって？」

「ん？ ああ…なんか最近、お前一人でいるのを避けてる気がするんだけど、大丈夫か？」

痛い所を突かれた。

最近、確かに誰かと一緒にいて一人になる時間を極力減らそうとしていた。

( おやが隠づいてたなんて… でも心配はかけたくない… )

図星だつたけど、駿君に心配をかけたくないから

「 気のせいだよ！ 大丈夫、大丈夫！」

そうこうで、『まかした。

「 やうか… なういや。変なこと聞いたな。忘れてくれ」

『まかせないと思つていたが、なんとか『まかせたようなので少し安心した。

「 じゃあ、私そろそろ、ね…？」 部屋に戻りつとした時、視界が歪んで意識が遠くなつていつた…

・

なんだかんだで一日ミクは俺の部屋に居座つていた。

( まあ、思つたより会話の内容が気になかつたな )

そんなことをぼんやり考えてくると

「 じゃあ、私そろそろ、ね…？」

ミクが自分の部屋に戻りつとした時、よろめいたと思つたり

「 あ…れ…」

そのまま倒れてしまった。

「あ、おこー、ミクー？」

倒れたミクに近寄る。

どうやら氣絶しているみたいだった。

「つたぐ……世話の焼けた……」

とつあえず、ミクをおぶってミクの部屋に向かう。  
ミクのかばんに入つてた鍵で玄関を開け、ミクには悪いが勝手に  
上がりこませてもらい寝室に向かつ。  
そしてベッドに寝かせた。

(体調悪かったのか?)

明日のことをもあるので、一応額に手を当てる。

(熱はないのか。なら何が…)

とつあえず自分の部屋にまだ置いてあるミクのかばんを取りに戻つ  
た。

(あいつ、持病でも持つてんのかな…)

ミクのかばんを持って、ミクのところに戻りながらそんなことを考  
える。

寝室を覗くとまだミクは氣を失つてこらままのようだつた。

「…………」

明日もあるし、なんか心配なので、とりあえず様子を見る」とことした。

・・・

「ミク！危ない！」

お母さんが私を突き飛ばす。

キイイイイー！！

「キヤアアアアア！」

鈍い音と共に田の前でお母さんが宙を舞い、地面に吊りつけられる。

「あ…母さん？」

何が起ったのか分からぬ。周りの人々がパニックになつたり慌てている。

「ねえ、お母さん！」

倒れた母に呼びかける。でもいくら呼びかけても返事は帰つて来ない。

田の前が真っ暗になる。

次に田に飛び込んで来たのは、学校の風景だった。

「ねえ聞いた？リムジンでいつも登校してるの、初音さんじょ？」

「あ～知つてゐるよそれ。やつぱりお金持つは違うね～」

「だよね～。しかもなんかいい子ぶつくてムカつくし」

女子生徒の話し声が聞こえる。

これは夢。封印したい記憶の夢。

(嫌、止めて……)

「…クーおーミクー」

聞き慣れた声で田が覚める。

「ん…あ、あれ…駿…君?」

田の前に心配そうな顔をした、駿君の顔があつた。

「大丈夫か? かなりうなされてたぞ?」

「あ…うん…ごめん…」

思わず彼に向かつて謝る。

「謝んななくていいけど。まあいいや、ココア飲むか?」

そういって、駿君はコップを差し出してくれた。

「ありがとウ…」

そうこうで差し出されたコップを受け取り、少しだけココアを飲んだ。

「…おいしい」

「そりやよかつた」

彼もココアの飲み一息ついた。  
今日三度目の沈黙。

「…………」

今度は先に沈黙を破ったのは駿君だった。

「明日、出掛けられるのか？」

口を開いた駿君がまず明日のことを聞く。  
当然だろ？。突然目の前で倒れ込まれたら、私だって同じことを聞くと思ひ。

「うん。大丈夫。ちょっと最近寝不足気味で、ちょっと疲れただけだから…」

心配かけないよつに、嘘をつく。

「やうか…まあ無理はすんなよ？」

とは言えやはり心配をかけてしまっているのだと思つ。少しだけ、駿君の顔色が暗くなつた。

「心配してくれて、ありがとう。でも私は大丈夫だから」

そういうて、うまく出来てるか分からぬけど笑顔を見せた。

「ふ…全然大丈夫そうな顔してないんだけどな。ま、無理するだけの気力があるなら大丈夫だろ。明日、遅刻するなよ?」

そういうて、彼は部屋から出ていった。

(…………いつか話すべきなのかな)

自分の持つトラウマ。それとはきつと向き合わなければならぬんだと思う。  
でも今は、今だけは忘れたかった。

(明日は皆に迷惑かけないようになきやな…)

そう決意して、明日の準備を始めた。

## 第6話 // クのトライア（後書き）

会話がめっぽうやさしく、氣がする。

まあ例によつてぐだぐだです。

改めて、小説を書くのが難しいことを実感しました。

第7話 頭とお玉かけ 前編（前書き）

第7話です。

## 第7話 鮎とお田かけ 前編

「リンー起きるー遅刻するぞー。」

「んー…後3分だけ…」

5月4日、田曜日。

今日はミク姉ちゃんや駿兄ちゃんと遊びに行く日だ。  
遊びに行こうと言は始めたのはリンなのだが、当の本人はまだ  
起きようとしない。

(言に出しつぺが遅刻は洒落にならんだり…)

そんな不安をよそにまた爆睡しそうなリンを

「せりー起きるー今日はミク姉ちゃん達と遊びに行くんだろ?」「  
そうこつて布団を剥ぎ取つた。

「わやひーひよーレンー何すんのー。」

「文句言つてないで出掛けの準備しぃ。俺達が遅刻するのはまずい  
だろ」

そうリンに向かつて言ひと、リンは

「遅刻つて、どつか行くんだっけ?」

と、キヨトーンとした顔で聞き返して來た。

(…人の話を聞いてなかつたのか?)

また同じことを言わなければならぬのは氣にくわぬいが、言わないと動かなううので

「今日はミク姉ちゃん達と遊びに行く予定だろー。」

と答えると、リンが

「わああああー忘れてたあああー。」

と大声を出してベッドから飛び起きた。

「ひー、ひるやいな。朝から大声だすんじやねえよ…」

耳を塞いだ俺に

「今日何時集合だっけ!?」

と慌てた様子のリンが聞く。

「10時。ちなみに今9時15分」

そう答えると

「集合場所どこだっけ!?」

とさうに質問してきたので

(言いに出しつべなんだからその辺記憶しとけよ…)

と内心思いつつ

「有賀島町駅の前だよ。ほら、急いでしたくしない」とリンにいった。

それから30分後

「「行つてきま～す」」

一人で声を揃えて言いながら家を飛び出す。

「ほりレンー急ぐー！」

走り出したリンが俺に向かつて叫び。

「リンーちゃんと前を見て走れよー！」

「だつてレンが遅いんだもん！」

確かにリンの方が足も早いし体力もある。

：運動で女に負けるのは男としてどうかと思つが、俺はリンと違つて運動は好きじゃないから別にいいと思つ。

必死に走ること約10分。ようやく駅に着いた。

「はあっ、はあっ、はあっ……あ、あれ……お姉ちゃん達……まだ……来てない？」

リンに言われて辺りを見回す。

「はあっ……はあっ……確かに……あ……來た！」

俺達の來た方向とは反対側の道からミク姉ちゃんと、駿兄ちゃんが走つて來た。

「はあっ……はあっ……」めへん！待つた？

息を切らしながらミク姉ちゃんが言ひへ。

「ううん！私達も今來たところだよー。」

「ほんと？よかった……」

待たせていると思つていたのか、リンの言葉を聞いてミク姉ちゃんは少し安心したみたいだつた。

そこには

「でもお前がもつと早く準備すればここまで急がなくてよかつたんだからな」

と駿兄ちゃんが釘を刺す。

「むう……しうがなこじやん！寝坊しちやつたんだか……」

「……せいよー」

(駿兄ちゃんも待たされてたんだ…)

心のなかで、お互に振り回されたるな、と思った。

「お姉ちゃん!早く行こ」うよーー。」

すでに改札の前に立っていたリンが叫ぶ。

「じめ～ん!今行くーー。あ、一人とも行こー。」

「はいはい」

さう言つて、俺達は駅の中に入つていった。

「なあ、今日まだ」「行くんだ?」

電車に乗つて少し経つた頃、駿兄ちゃんが俺に聞いて來た。

「聞いてないの?..」

質問を質問で返す。

「いや、聞いたけど何言つてるかよく分からんかった

「ふ～ん…今日は遊園地に行くんだよ

まあ俺達がこれから行く遊園地は「有賀島アリゾーネメントワン  
ダーランド」という知らない人が聞いたら呪文にしか聞こえない名

前なので、駿兄ちゃんは知らなくても無理はないだろう。  
：ゲームの知識しかなさそうだし。

「レン。お前、今俺がゲームのことしか分からぬ奴だつて思った  
る？」

俺の心を見透かしたような言葉に思わず

「そんなわけねーじゃん！？」

と大声で反論してしまつた。

周りの人の視線が一気に俺に集中する。

「図星か。レン、後で覚悟しとけよ？」

周りの視線にさらされて、頭が真っ白になつた俺に駿兄ちゃんが追  
撃をかけるように言った。

・ · · · ·

電車の中でレンに行き先を聞いて、鎌をかけてみたら図星だった  
らしかつたので、地味な死刑宣告的なものでした。

(分かりやすくて面白いね！)

心中で笑いつつ、隣にいるミク達の方を見る。

「ねえねえお姉ちゃん。今日はどんなアトラクションに行くーー？」

「ん~…何つて言われても私、引っ越してきたばかりだからどんなのがあるか分からないよ…」

リンの質問に答えられないミクは少し申し訳なさそうな顔をした。

「あ、そつか…ん~とじゅあね、お姉ちゃんジエットコースター乗れる?」

リンがミクに聞く。

「ん~…実は私、ジエットコースター乗ったこと無いんだ…」

ミクの答えにリンは

「え~っ!…お姉ちゃんジエットコースター乗ったこと無いの!…?」  
と、大声で聞き返す。

「ちょっと、リンちゃん…声大きいよ…」

ミクが慌てて制止するが、またも周りの視線が俺達に集中する。

(「Jの双子…とつたのボリューム調節の概念はないんだな…）

先程のレンの事を思い出し、少しだけ溜め息をついた。

が決定的にリンがレンと違うのは、周りの視線が自分に集中しうがお構いなしに大声で話すことだった。

「ジエットコースター乗ったこと無いなんて…!お姉ちゃん人生の

5分の2は撲ishてるよ。」

(それはないだろ。ていつか5分の2つて大分中途半端な数だした  
な…)

「え、そんなに面白いの? ジョットゴースターって

ミクがレンに質問する。

「せりゃあもうー乗れば分かるよー。」

乗るのが待ちきれないと言つた表情でミクの質問に答えるレン。  
その時

「わりいけど俺はバスな」

とレンが言つた。

「えへーなんでー? レンも一緒に乗るつよー楽しいじゃん、ジョ  
ットゴースター!」

だがレンは

「断る。だつてあれただ高速で動いてるだけの乗り物じゃん。だつ  
たら俺はスポーツカーで飛ばした方が楽しいよ」

とぱつせりつ切り捨てた。

すると

「レンの意地悪ーせりつて屁理屈ばかり言つてーせつかく監で

来たのに……」

とリンが田に涙を浮かべてレンを睨みつけた。そして力なく椅子に座りこんでしまった。

「リ、リンちゃん…大丈夫だよーレン君も悪気があつて言つた訳じ  
や…」

とミクがなだめるが

「レンなんて知らない！」

と言つてシクシク泣き始めてしまつた。

「おーレン。流石に今は言ひ過ぎじゃないのか？」

俺もレンに声をかける。  
だが

「別に……」のくらこいつのことでだから

と言つてそっぽを向いた。

(……なるほど。やつこいつとか……)

レンがあれだけ言つた理由が分かり、思わず俺はにやけてしまつた。

そしてレンに

「おーレン。お前、ジヒットコースターに乗るの、怖いんだろ？」

と言つてやつた。

「なつ……そんなわけねーじゃん! あ、あんなの怖くも何とも……」

言いかけて、俺の策に引っ掛けたことに気がついたようだ。  
追撃をかけるように俺が

「おこりん。レン、ジョットロースター乗るつひよ」

とまだ啜り泣きをしてくるリンに声をかける。

「ほんと? レン……一緒に乗つてくれるの?」

と、まだ涙を浮かべながらレンに聞く。

「あ、おひ……乗つて……やめよ」

流石に断れないこと思つたのか、承諾するレン。

(ほんと、分かりやすい双子だな)

またそんな事を考えながら、ミクの方を見るとサインが送られてきた。

とつあえずサインを返す。  
そして

「女つてのはな、泣かせない方がいいんだぜ? 後ですぐ戻しちゃへ返  
しじゃくるから」

と半ば放心状態のレンの肩を叩いた。

・

電車を降りてから私達はとりあえずトイレ休憩をとることにした。用を済ませ手を洗つていると、レンちゃんが横で

「お姉ちゃん、さつきは「めんね。レンつたらほんとにわがままなんだから」

と謝つて来た。おそらく、ジョン・スターの件の事だと思つ。「大丈夫だよ。でもレン君、一緒に乗つてくれると云つてくれてよかつたね！」

そう私が云つと、レンちゃんは満面の笑みを浮かべて

「うんー。まあ早く行けー。きつと一人とも待つてるよー。」

わざわざ私の手を引いて歩きはじめた。

トイレから出ると既に男子一人は改札の前で待つていた。

「お、やつと来たか

私達に気づいた駿君がレン君との会話を止め、ポケットから切符を取り出し改札を抜けた。

「ああ、早く行けー。俺、腹減つしまったよー」

二つも少しづつ呑んで口調で聞け。

「コンもお腹すいたー！」

今日は集合が10時で電車には30分くらいしか揺られてないから、まだ10時30分くらいにしかなってないはず。

「まだお腹には早いんじゃない？」

そうこうして、腕時計を見る。

(「うそ…まだ10時35分だね。私はまだお腹空かないな）

「コンは今日朝飯まともに食ってなかつたしな

レン君が呆れたように言った。

「だつて寝坊しちゃつたんだからじょつがないじゃんー！」

リン君がなんば膨れつ面をして言ひ返す。

「あれ？じやあ駿君も今日寝坊したの？」

こんな時間にお腹が空くなつたら駿君も朝飯食べてないのだと思いつ質問する。

「こや。今日は8時に起きたよ。起きてもすぐ飯食つたから消化しきつちまつたんだ」

若干、駿君の顔に

(残念でした)

みたいな感じの表情が浮かんでちょっと悔しくなった。

(私、今日は9時20分に起きたからなあ……)

朝ご飯は「あえずネギある」と一本を焼いて食べた。家を出た時

「…またネギ焼いたろ?」

と駿君に言われてびきつとした。

(お皿、ネギ抜きにしてみようかな……)

またお皿にネギを食べたら、多分駿君に生暖かい皿で見られると思  
う。流石にそれはいりこりとつら。

「まあ、でもたまには早めにお皿食べてもいいつか。ねえ、皿食べ  
たい?」

そうについて、意見を聞いてみる。

「私、ハンバーグがいい!」  
と、リンちゃん。

「僕は何でもいいよ

「俺も食べいや向でもいいや

レン君と駿君は何でいいよ

「じゃあ、遊園地の近くのフードレスでいい?

「うむ

「うん…やつたあ…」

「はーい

とこのへりとギフトマリエスに行くべいことになつた。

「こひりしゃいませ～何名様ですか？」

「4人で～す！」

リンちゃんが元気に答え、席に案内される。  
流石にまだお昼には早いから他に来ている人は少なかつた。

「何にしようかな…」

メニューを見て悩む。今開いているページにはネギたま丼が載つていた。

(でもなあ…)

ちりと向かいに座っている駿君を見る。  
もう決まったのか、既にメニューは見ていなかつた。

(…たまこは違うものの頼んでみよつかな)

そう思い、私は別のページを開いた。

「既決まつた～？」

リンちゃんが既に聞く。

「決まつたよ」

「おう」

「決まつた」

全員が決ましたのを確認すると

「じゃあ私がピンポン押すね！」

と、押そうとした時

「俺もやりたいー！」

ヒレン君が言こぼじめた。

「やだ！私が押すのー！」

「こつもリンばっかり押してるだるー。」

「こーじゅん！これは私の仕事なー。」

また喧嘩っぽくなつて来やけつたから

「ちよつと一人とも……落ち着いてよ。」これは公平にジャンケンすれば…

そつぱにかかるとほば同時こ

「「ジャンケンポンー!」」

とジャンケンをしてこた。

「やつたあー私の勝ちー!」

「へんへーーするこやうなボタンかい!」

ジャンケンに勝つたリンちゃんは文句を言つてレン君をよそにボタンを押した。

「(注文はお決まりなられましたか?)」

「えつと…田玉焼きハンバーグを一つー!」

「田玉焼きハンバーグを一つー!」

店員が復唱する。

「マルゲリータを一つー!」

どうやら甲子は同じ物を頼んだみたいだつた。

「あとマーティソーススパゲッティを一つください」

「かしこまりました。ご注文は以上でよろしくでしょうか?」  
するとリンちゃんが慌てて

「あつー・ドリンクバーを四つくださいー!」

と追加した。

「かしこまりました」

そういって店員は店の奥に入つていった。

「私、ジューク持つて来る!」

リンちゃんが勢いよく立ち上がる。

「あ、じゃあ私も行く。一人とも、何がいい?」

男子一人にそう聞く。

「僕はゴーラで」

とレン君。

「何でもいい」

と駿君。

「分かつた」

やつこつて私達はリンクバーに向かつた。

「あ～美味しかったあー。」

リンちゃんが満足げに囁く。

「ほんと、美味しかったね～」

私もリンちゃんに同意した。

「わあ、飯も食つたし、一息着いたら遊園地行いに行か

そうこつて駿君は出発の準備を整えた。

「うそー行こ行こー」

リンちゃんが元気に返事をする。

「リン、あんまつはしゃいで迷子になるなよ。」

レン君がからかいつゝ。

「むづ迷子になんかならないもんね～」

そつこつて、リンちゃんはレン君に向かつてあつかんべーをした。

## 第7話 順りお出かけ 前編（後書き）

学校で疲れてしまつてなかなか思うように執筆作業が進まないです……

ちょっとこの先不定期更新になりやすいかもしません。  
部活の大会やテストなんかの予定が詰まつてるので……

学校爆発しろー！

## 第8話 鮎と田舎かわ 中編

「早く早くーーー。」

遊園地のゲートを抜けですべり私は少し走って顎を呼ぶ。

「コンーーあんまり離れるなよーー。」

とレンが叫ぶ。

「大丈夫だつてーーー。」

そう返事をして、再び走りつつ前を向こうとした時

《どんーーー。》

「やめやめーーー。」

「ねりーーー。」

誰かにぶつかってしまった。

「うーーめんなさいーー。」

慌ててぶつかった相手に謝る。

「いやいや、大丈夫だよ。でも、わやんと前を見て歩いてね?」

と言つて許してもらひえた。

「ほら～！だから言つたろ？あまり離れるなつて。すいません！連れが迷惑かけて」

私は駆け寄つて来たレンも一緒に謝る。

「ははは！そんなに謝らなくていいよ」

私が顔を上げると、そこには青い髪をした大学生くらいの男の人人が立っていた。

もう大分暖かいというのに何故かマフラーをしていて、まだそこまで暑くもないのに片手には大量のアイスを持っていた。

（…かつこいい）

見た瞬間そう思った。

「カイト！何してんのよー早く行くわよー！」

「はいはい、今行くよー」

ほんの10メートル程先に彼の連れの人達しき人がいた。

一人は赤が基調の服を着た茶髪でショートヘアの女人。  
もう一人は黒が基調の服を着た腰まであるピンク色の髪をした女人  
人だった。

（二人とも胸おつきい…）

どちらも美人だったがそれよりまずそこに目が行ってしまった。

(「いやましいなあ……）

そんなことを思つていたら

「じゃあ、俺いくよ」

そうこうでカイトと呼ばれた男の人は行つてしまつた。

「あ……」

私はしばらく頭が動かなくてその場に座り込んだままだつた。

「……ン！ リン！ 大丈夫か？」

ふつと我に帰るとレンが呼んでいた。

「え……あ……」めん。ぼーっとしちやつた

「おいおこ……しつかりしてくれよ……」

レンが呆れたように叫ぶ。

「うるさいなあ。私だつてたまにはぼーとすゐのー。」

頬を膨らませて言い返した。

「はいはい……で、まあビームから行くの？」

と、レンに聞かれる。

「 もひるん…ジヒツトコースター…」

答え、私は立ち上がりつて歩き出す。

「 こきなりかあ…」

レンがぼやくのが聞こえた気がするけど、気にしない…

「 お姉ちや～ん…早く行こ～…」

後ろを向いてお姉ちゃんを呼ぶ。

「 あ、リンちゃん待つて…」

ジョットコースターの前まで来て、列の一一番後ろに並ぶ。

「 うわあ…結構並んでるね…」

お姉ちゃんが圧倒されたように言つ。

「 30分待ちだよ。結構待つな

案内板を見て駿お兄ちやんがお姉ちゃんに向かつて言つ。

「 30分も待つんだ…私、遊園地に来たのかなり久しぶりだからこんなに並ぶなんて忘れてたなあ」

少しげんなりしている一人に私は

「もう！一人ともこのくらいで何んなりしてちやダメだよ？」

と言つてあげる。

「はあ？ 30分も待つのにこのくらいはないだろ…」

お兄ちゃんが呆れたように叫ぶ。

「30分なんて全然空いてる方だよ？ いつもは100分とか平氣で並ぶんだから！」

そういった私の答えに

「「100分も待つのー？」」

と、一人でハモっていた。

(この一人、もしかしてくつこてる？)

あまりに綺麗なハモりだったので、思わずそう思つた。

そんなことを言つているうちに、乗る順番が近づいてきた。ジユットゴースターに乗る時の注意アナウンスが流れる。

『この度はこのアトラクションにおいていただき、真にありがとうございます。本アトラクションは…』

もう聞き慣れたアナウンスなので、聞き流す。

そして私達が乗る番がやって来た。

「お姉ちゃん！一緒に乗ろう！」

そうこうしてお姉ちゃんの手を引く。

「へ、うん…一緒に乗ろう！」

そうこうしたお姉ちゃんの顔はちょっと不自然だった。

「お姉ちゃん、怖い？」

シートに座りながらお姉ちゃんに声をかける。

「う、うん…なんかわざから悲鳴みたいなのが聞こえる…」

不安そうな顔をしてお姉ちゃんが答える。

「大丈夫だよ！怖かつたら私の手を握つていいからさー。」

私がそう言つと、コースターが動き出した。

左手に温もりを感じたから、ふと見るとお姉ちゃんが私の手を握つていた。

私もお姉ちゃんの手を握り返す。

動き出しつから少し経つた頃、コースターのスピードが落ちてきた。

「も、もう終わり？」

お姉ちゃんが私の手を握りながら聞いてきた。

「うひ。これから急降下だよ？」

そう答えると

「え…？ やだ…怖いよ…」

そういうお姉さんの顔がもつと強張った。

「大丈夫だつて！ ほら、私の手を握つてれば安心でしょ？」

そういうお姉さんの手を握る。

そんなことをしてくるうちにコースターは上り坂を上りきりつつしていた。

私の手を握るお姉さんの手の力が一層強くなる。

「じゅあお姉さん、手を挙げるよ…」

そういうて私は手を思いつ切り上に挙げる。

「えつ…ちょっとこけんちや…あやあああ…」

お姉さんが言い終わる前にコースターは急降下始めた。

降下した時のスピードを生かしてコースターはまた上り坂を登つてさらに急降下する。

「うわあああ…」

急降下の途中、後ろでレンが絶叫しているのが聞こえた。

(レン、ジヒット「ースターが怖いから乗るの嫌がつたんだ)

電車の中での出来事を思い出し、その時のレンの態度に納得した。

そんなことを考へて、いのちにも「ースターは急カーブや急上昇、急降下を続けていて、そのたびに後ろでレンが絶叫し、お姉ちゃんは強く私の手を握り締めていた。

「ははははっ……おいレン！ そんな下向いてないでもっと景色見よ  
うぜーーー。」

後ろからお兄ちゃんの声が聞こえた後

「嫌だーーー！ 僕はこの体勢が一番楽なんだーーー。」

と拍手をする声が聞こえたけど

「硬い」というなよーーー。景色きれいだぜーー。」

と言っていた。

後ろでそんなことをして、いのちにスピードが落ちて、「ースターはまた上り坂を登り始めた。

「リ、リンちゃん…まだ終わらないの…？」

横にいるお姉ちゃんが震えた声で聞いてきたから

「大丈夫だよ。次で最後だから」

と答えると

「よ、よかつた…」

と少し安心した表情をしたけど、すぐにそれもなくなつちやつた。だつて上り坂が今までで一番長かつたから。でも最後に一番凄いのをとつておくのは当たり前だと思つ。

「コンちゃん…」

お姉ちゃんが泣きそうな顔でこっちを見る。

「大丈夫だつて！」

そう励まし、クライマックスに備えた。

コースターが坂のてっぺんまで登りきりそして急降下をし始めた。

「いえーいーー！」

私は両手を挙げて思いつ切り風を受ける。

急降下中に感じる無重力感。

ほんの一瞬だけど、空を飛んでるような気分になれるその一瞬が、私は大好きだつた。

急降下が終わり、コースターがスピードを落としてゆっくり走る。

「お姉ちゃんー..どうだつた？」

いいながら、隣にいるお姉ちゃんの方を向く。

「ひっく…」「うん…えぐつ…怖かった…」

よつぽど怖かったのか、お姉ちゃんはちよつと泣いていた。

「せつか…」「めんね…無理につき合わせやつて…」

少しだけ申し訳ない気持ちが湧いた。でも

「ううん…大丈夫…怖かつたけど、リンちゃんとなじむつ  
一回乗つてもいいよ」

と半泣き顔で笑いながらそういってくれた。

(私が泣きやうだよう…)

お姉ちゃんの言葉で私が泣きそつになつた。でもコースターが止ま  
つたのでとりあえず降りる。

「おじレン。大丈夫か?」

ジョンストンコースターから出てきてふと後ろを振り向くと、半分魂  
が抜けてしまつたような顔をしたレンがふらふらした足取りで出で  
きた。

「あはははーーーん、ゾンビみたいー！」

そう笑うと

「誰のおかげでこんなになつたと思つてゐんだーーー！」

と逆切れをされたけど

「レン。お前も男ならジムシートコースターへりに乗れるよ！」になれ

とお兄ちゃんに言わされて黙りこんでじやつてた。

それからいろんなアトラクションを回つた。

「コーヒーカップに乗つてお兄ちゃんと一緒に田が回つて男子一人に  
呆れられたり、『ゴーカート』に行って子供みたいにはしゃぐレン達に  
呆れたりした。

「つふふつ。駿君達、子供みたいだね」

はしゃぐレン達を見てお兄ちゃんが笑う。

「ほんとだね。もつ中学生と高校生なんだから、あんなにはしゃが  
なくてもいいと思つんだ」

私がそうこうと

「きつと私達女子には理解できないんだよ。男の子がぬいぐるみ  
や人形に興味がないのと一緒にでさ」

とお兄ちゃんが言った。

「そんなもんかなあ」

そつ返事をする。

ちなみに私達はゴーカートには乗らないで、近くのベンチに座つてジュースを飲みながら色々な話をしていた。

「……でね、私その時ファインプレーしたの……」

今は中学校であった出来事をお姉ちゃんに話してて、その時の私の武勇伝を聞かせていた。

「私は部活に入つてないからなあ・・・リンちゃんみたいな活躍はしないや

私の話を聞いてお姉ちゃんがそう言った。

「えっ？ お姉ちゃん帰宅部なの？」

## 私の質問に

「うん。なんだか私に合いそうな部活、見つからなくて」「

そういう少しお姉ちゃんの表情が暗くなつた。

「だ、大丈夫だよ！帰宅部だつてちゃんとした部活だと思うよ！…俺には帰る家がある！帰宅部員募集中！…」みたいな言葉もあるくらいだし…」

必死でフォローしようとする私に

「ふふつーあっがとっンちやん」

と笑顔で返してくれた。

「ヒカルちゃん、私もさかがひちゃんと眞にならんだけど、私がやつこいつと

「眞になつてゐる」と? なあ」「ア?」

とお姉ちゃんがきょとんとした顔で、うつむきを見た。

「ミクお姉ちゃんは駿お兄ちゃんつて付きましたの?」

やつ質問した瞬間

「えつ・・・いや・・・わ、私達はそんな関係じゃないよ?」

とお姉ちゃんは否定したけど、顔は真っ赤になっていた。

「じゃあ、お姉ちゃんはお兄ちゃんの」と、好きなのは?

やつと追撃をかけるように聞いてみる。

「えつ・・・えつと・・・それは・・・その・・・」

お姉ちゃんは完全にパニックになつていて、つまくしゃべれなかつた。おまけにさつきよりも顔が真っ赤になつてて

(「ね、完全に図星なんだな・・・」)

と思ひしかなこよひなリアクションだつた。

「あははっーお姉ちゃん、もう完全に好きなんだねー。」

そつからかうよひに私が言ひと

「えつと・いや・・・あう・・・」

もはや拒否をするとこまで頭が回らないのか、お姉ちゃんは顔を真っ赤にして下を向いていた。

「お、いたいた。お待たせ」

そしにちゅうど男子一人が帰ってきた。

「ん? ミク、顔真っ赤だぞ。大丈夫か?」

まだ顔を真っ赤にしたまま下を向いていたお姉ちゃんに気がついてお兄ちゃんが声をかける。

「ひゃあーえーうん…大丈夫だよー」

「ほんとか? 熱でもあるんじゃないのか?」

そう言われたお姉ちゃんは

「だ、大丈夫だつてーそ、それより次ビに行く?」

と無理矢理話題を変えようとした。

「……」

もつ面倒くさくなつたのか、お兄ちゃんはそれ以上追及しなかつた。

「あ、じゃあそろそろ田中暮れてきたから早めに飯食べない?」

トレントが言ったので

「ん、そりだねー。そりよつかー。」

助かったと言わんばかりの表情でお姉ちゃんが賛成して

「そりと決まれば早速行こう。」

と、やせくわと歩こて行つてしまつた。

「あー、お姉ちゃん待つてー。」

そつこつて私はお姉ちゃんを追いかけた。

## 第9話 飯とお出かけ 後編

「で、何食いに行くんだ?」

飯を食いに行くつて話になつたはいいが、どうで何を食べるかは全く話してなかつた。

(さつきからミクの様子もなんか変だしな…)

そんなことを考えていると

「カレーでいいんじゃない?」

ヒミクが言った。

「私、カレーがいい!」

「僕もカレーがいいや」

どうやら双子はカレーがいいみたいなので

「じゃあカレー屋さん行くつか?」

と俺も同意する。

「じゃあカレー屋さん行くつか?」

そうこうしてヒミクは歩き出す。

(まあ、様子が変かどうかなんて気にしなくていいや。面倒くさい  
し…)

もう思つて、皆の後をついていった。

「思つたより混んでるねえ…」

カレー屋に着いたのはいいが、俺達が想像していたより多くの人が既に店に訪れていた。

「私、席探してくるねー！」

そうついつり、リンは店の奥の方に歩いて行つた。

俺も空いている席がないか店を見渡すが、どの席も他の客が座つており、空いている席は見当たらなかつた。

「この店は無理かな…」

そう呟いた時、

「みんなー！あつたよー！」

とこづりの声が聞こえてきたので、そっちの方に向かつて歩く。少し店の中を歩くと、リンが手招きをしていた。

「お、確かにちょうど四つ席が空いてるな。リンGっだな」

そうついつて俺は席に着く。

が、褒められたリンはきょとんとした顔で「ひりひりを見て

「Gって…何？」

と聞いてきた。

（しまつた…）にはわかんないのか…）

思わずネットで使う言葉を使ってしまったことに気がつき、自覚はしているがゲーム中毒の自分に少しげんなりした。

「Gってのはグッジョブの略だ。要するによくやつたって褒めてるってことや」

若干専門用語を使ってしまつたことを反省しながら説明をする。

「へえ～そういう意味なんだ。私、英語苦手だからなあ」

納得したリンがそう呟きながら席に着いた。

とりあえず用語の説明も終わつたので、メニューを手に取つてどんなものがあるか見てみる。

（…お、カツカレーあるじやん）

何ページかめくつていると、カツカレーの絵が目に入つた。

（カツカレーでいいや）

メニューが決まつたので元の場所に戻す。

「ん~…何にしようかな…」

隣でリンゴがうなる。

周りを見渡すと、俺以外の奴らはまだ決まってないようだった。

(まだ皆決まってないのか…まあいいや。曲でも聞きながら待つり)

…

そう思って、ポケットから音楽プレーヤーを取り出し、曲を聞こうとした時

「ねえ、駿君。もう決まったの?」

ヒミクが声をかけてきた。

「ああ。決まったよ」

そつ答えると

「相変わらず早いね…」

ヒミクがそう呟き、再びメニューを見始めた。

(むしろ何故メニュー選ぶのにそんな時間かかんだ?)

そう思いながら、イヤホンを耳につけ曲を流す。

(やっぱ神曲そこねー)

と曲を聴きながらほんやつと考えた。

「お待たせしました～カツカレーになります」

店員がカツカレーを持って来たので、小さく拳手をして自分の注文であることを示す。

「やつときたよ…さて、いただきます」と

そう呟いて、俺はカツカレーを食べはじめた。

混んでるとはいえ、来るのが遅くて少々待ち遠しいのにも関わらず、よりもよって他の皆のメニューか来て5分以上経っても自分の分は来ないときはさすがにイラッとした。  
(まあ、うまいからいいか)

食べながらそう思つてカツカレーを頬張る。

「ん～…おいしく…！」

テーブルを挟んで対角線上に座つているリンが幸せそうな表情でそう呟つ。

「ほんと、ここのかレーおいしいね」

リンの隣、つまり俺の正面に座つてているリクも同意する。

「ま、この店は当たりだな

そういうながら、「ツブの水を飲む。

「あー！駿お兄ちゃん水飲んだー！」

突然、リンが叫ぶ。

「ああ？別に水くらい飲んだつていいだろ？」

そう答えた俺に

「ダメだよ！カレーを食べる時は食べ終わるまで水を飲んじゃいけないってルールでしょ！」

と叱るよつてリンが囁く。

「そんなルール、いつ決めた？」

そう聞くと

「さつき監督が決めたじゃん！カレーが来るの、待ってる間にこも

と言われたので

「なあレン。そんなの決めてたっけ？」

と隣に座っているレンに聞くと

「決めたよ？まあ、駿兄ちゃんはイヤホンして曲聞いてて上の空だつたから覚えてないだろうけど」

と嫌味たっぷりな感じで言われた。

(…まだジョン・スターの」と、弓をかってたのかよ…)

レンの態度は明らかに仕返しをするような態度だったのに、理由はすぐに分かった。

(ちよつと調子乗りますぎちまつたかな…)

自分のした行動を少し反省しながらも

「まあ、やつちまつたことはしょうがないだろ」

と言つて再び水を一口飲み、カレーの残りを口にすると

「…ん?」

少しあつけと味が違つことに気づいた。そしてその瞬間、凄まじい辛さが口の中に広がった。

「～～～つーーー辛いいいーーー」

そう叫ぶが、あまりの辛さに身動きが取れなかつた。

「や～いや～いーー引つ掛けた引っ掛けたーー！」

視界の端で双子が喜んでいるのが見え、殺意が沸いたが  
(と、とつあえず水を飲もう…)

殺意より水分を摂ることが今の俺の最優先事項なので、コップを探した。しかし

(あ、あれ…コップ…ないぞ…)

さつままで手元に置いてあつたはずの自分のコップがなくなつていった。

「お、おい…誰か俺のコップ…」

セツニイかけた時

「カレー食べ終わるまで飲み物はなしだよ~お兄ちゃん!~

と、笑顔でリンが言つた。

「せうだよ駿兄ちゃん。ルールはけやんとせうなきや」

隣にいるレンも一緒になつて言つ。

「ち、畜生…おこ//ク、このガキどもになんか言つてやつてくれ。んで水をくれ…」

セツニイクに助けを求めるものの

「え…ま、まあルールはルールだからさ?私もずっと我慢してゐるし

…」

と//クまで参加していく助けてくれないので

「あ…くしょい…」

そう毒づき、残ったカレーを頑張って食べることにした。だが

「ぐわつーわっさよりさりに辛いじやねえかー…これ…」  
またも地獄を見た。

カレーを皿で吃べるのはよかつたけど、途中でリンちゃんが  
「カレー食べ終わるまでに水を飲んだら罰としてタバスコ入れるつ  
てことで…！」

つて言い出して、「冗談抜きで本当にやるみたいだつたから私も頑張  
つて水を飲むのを我慢してたら、田の前で駿君が普通に水を飲んじ  
やつた。

(あ…飲んじゃつた…タバスコだなあ…)

やつ思つてみると

「あー！駿お兄ちゃん水飲んだー！」

とリンちゃんが大声で叫んだ。

「ああ？別に水くらい飲んだつていいだろ？」

そう返す駿君

「ダメだよー。カレーを食べる時は食べ終わるまで水を飲んじゃいけないってルールでしょー。」

とコンちゃんが言い返す。

(お姉ちゃんタバスコ入れてー。)

言い返しながらコンちゃんが皿でサインを送つてくる。

(ニ、ニヤ……やっぱり止めた方が…)

(ダメー。早くしてー。)

コンちゃんの皿があまりにも真剣というか怖かったところか…とにかく凄い睨みつけられちゃったから

(「あん駿君ーー。）

そう思いながらタバスコを入れた。

「まあ、やつはまたことはじょうがないだろ？」

そういうて、また水を飲んでしまいタバスコを入れたカレーを口にした。

でもやっぱすぐには気づいたのか、駿君の表情が変わり

「~~~~~辛~~~~~」

と口元手を拭いて呟んだ。

(ほんとうめんなさいー)

心の中でわい謝るナビ

(お姉ちゃんーお兄ちゃんのコラボパッケージ持つてきへー)

ヒ、またコンピュータにアイサインを送り続けられたから

(…駿君頑張ってー)

と心の中で叫んでコラボをうながせられる。

「お、おー……誰か俺のコラボ…」

駿君が手元にコラボがなことには気づいたが、自分のコラボを探してたけどそのコラボは私の膝の上置いてあるので見つけられなーのは当たり前だった。

結局、水を飲まずに残りのカレーを食べることにした駿君だったけど、コラボを探してるうちにレン君が追加でコショウもかけたので食べ終わる頃には目が死んでいた。

「まだかなー」

退屈ひつかひにレン君ちやんが言った。

ちなみに今は遊園地の醍醐味とも言えると黙りパレードを見るために席を陣取つて待つてこるとこうだった。

「まだまだだな。」J-Jをパレードが通るのは最後の方なんだから

レン君がそうこうと

「えへ…なんで最初の方にしなかったの?」

と聞き返した。

「だつて…」

そうじつてレン君が田を向けた先には、魂が抜けたような田をしてキャラメルアイスを食べる駿君がいた。

「だらしないなあ…あのくらいでダウンするなんて…」

そうじんちゃんが囁いたから

「こ、こや…あれくらいされたら誰だってダウンすると思つよ?」

ヒフォローをしたけど

「お姉ちやん…こへりお兄ちやんが…」

「わーっ…」めん…分かつたから言わないで…」

言いかけるリンちゃんを慌てて遮ると、リンちゃんは意地の悪い顔をしてニヤリと笑った。

（「う…これを出せれたら勝てないよ…」）

勝ち誇った笑顔を見せるリンちゃんを尻目に溜め息をついてパレードが来る方向を向く。

「…まだこねえなパレード」

いつの間にか横にいた駿君が声をかけてきた。

「うん… そうだね」

そつ返すと

「… 体の方は大丈夫なのか？」

思つてもみない言葉が駿君の口から飛び出した。

きっと昨日のことがあつたから心配してくれたんだと思つ。

「えつ… うん… 大丈夫だよ。 心配してくれてありがとう」

何気ない駿君の気遣いが嬉しくて、笑顔でそつ返事すると

「別に。 ぶつ倒れられたら運ぶの俺だし。 そんなの面倒くさいから  
聞いただけだ」

と言つてそっぽを向いてしまった。

暗くてよく見えなかつたけど、ちょっとだけ駿君の顔が赤くなつて

たように見えた。

「あ、パレード来たよーーー！」

後ろでリンちゃんが言つて指を指した方を見ると、まさにパレードが私達の方に来ようとしているところだった。

それからはあつという間で、遊園地のキャラクター達が次々と登場して、踊つたりお姫さんに手を振つたりしていく

「わあ～！キャラティ～いつか向いてくれた～！～」

とコソチヤンはおねはしゃぎだつたり

「たまには遊園地も悪くないな

と隣で駿君がしみじみと呟いたり

「あの着ぐるみの中の人、大変なんだろ？な…」

とレン君が夢のないと言つていたり

「うわあ…踊つてるエキストラの人達、皆綺麗だなあ

と私は私で呟いたりしてパレードを楽しんだ。

「あ～楽しかったねぇ！！」

せう幸せそうな表情をしたレンちゃんが囁く。

「ほんと、楽しかったー。また、笛でいみりまー。」

私もレンちゃんに同意する。

「まあ、しょっちゅう嫌だなじたまに来るのはここかわな

駿君も同意してくれた。

「あれ? レン、どうしたの?」

「レンちゃんがレン君の方を向いて囁ねる。

「・・・お腹痛い・・・」

レン君の方を見ると、お腹を押さえて苦しそうだった。

「もーひーーー向でんの歌の読めないなー」と言っていた。

レン君に向かって歎み付けていたが、が囁く。

「ひ、ひねやーーー俺だつて好きでお腹痛くなつてる訳じゃないんだ  
かなつてしまつた。」

「まあ近くにトイレもあるけどだし、帰る前にトイレ寄つといひつか  
?」

と駿河が提案したので、トイレに行ってしまった。

「全べ……レントしたらいつもいつに限つてお腹痛くなつたりするんだ  
から……」

トイレに入つて順番待ちをしていたら、コンビニでが呆れたよう  
に言つた。

「でも、わづこいこんひかせんだつてそれからトイレ行きたかった  
んでしょう。」

パレードの最後の方から、ずっと同じじじじじじじじじじじじじじじじじ  
から、やつぱり」と

「ち、違つもん……別にトイレに行きたくてもじめじしてた訳ぢや  
ないもん!!」

と顔を赤くして言ひ返して來た。

「あれえ? 当たつたかな?」

れつやの仕返しのつもりで、ちよつと意地悪と言つてあざると

「~~~~~つー。」

りんぢやんせぬうな表情をした。

そんなことをしてくる内に個室が一つ同時に空いたので、私達は用

を足すために個室に入った。

用を済ませ個室から出る前に身だしなみを整えていた

「お姉ちゃん、先に外に出てるねー！」

とこうりんちゃんの声が聞こえたので

「うんー私もすぐに行くねー！」

そつこつて身だしなみを整えた。

外に出ると、男子一人はもう待つてたけど、そこはこうりんちゃんの姿はなかった。

「あれ? こうりんちゃんは?」

そつ駿君に聞くと

「見てねえよー! クソバカ、こうりんと一緒にじゃないのか?..」

と言われたから

「ううん。こうりんちゃん、先に外に出てるって言つて出でちゃったから...」

そつ答えると

「あ～あ…またリンの奴、迷子になつたのか…」

とレン君が面倒くさいこと言わんばかりの表情をした。

「レン、リンは携帯持つてないのか？」

駿君がレン君に質問する。

「僕らは携帯を共有してゐるんだ。今は俺が携帯を持つてゐるからリンには連絡つかないよ」

とレン君は冷静な態度で言つていたけど、その顔には明らかに心配そうにしている表情が浮かんでた。

「ならやむひとせ一つかな。風漬しに探すしかないだろ」

そう駿君が言ひ。

「そんなー無理だよー広すぎるもんーそれにリンがここに戻つて来るのを…」

そつと云いかけたレン君を

「あほかお前。リンが一度来た場所に戻つてくるような奴だと思つか? 仮にも双子ならそれくらい分かるだろ? それに今ならまだ遠くには行つてないだろ」

と言つて駿君が諭す。

「じゃあ私、もう一度トイレ見てくるー」

やうこつて私は踵を返さうとした時

「待てミクー。30分後にゲート前に集合だ。見つかったら連絡してくれ

やうこつて、皆それぞれ広がつて行つた。

「コンちゃん...こら~？」

トイレの中に向かつて呼びかかるナビ、やつぱり返事はなかつた。

(ビリ行つちやつたんだろ、...) . . .

トイレから出て来たのはよかつたんだけど、暗くて周りが良くみえなくて適当に辺りをうろついたら自分がどうして元のルートか分からなくなつてた。

「ミクお姉ちゃん...」

お姉ちゃんの名前を叫んでみたけど、返事なんて返つて来なくて、すこし不安になつて來た。

(脚、私のこと置いて、せめて元のルートをひいたり歩いて帰つた...)

やう思つと、なんだか涙が溢れてきた。

(泣いちゃダメだ。泣いちゃ…)

泣くのを必死で堪えようと下に向いて歩いていると

《どん…》

「きやつ…！」

「わつ…！」

誰かにぶつかってしまった。

「「」めんなさい…」

ぶつかった人に向かつて慌てて謝る。

「だ、大丈夫？」

そう声をかけられふと見上げると、そこにはあの青い髪をした男の人が立っていた。

「また会ったね。どうしたの？」

心配そうな顔をして男の人私が私の顔を覗き込んで

「ハンカチ、使うかい？」

とハンカチを差し出してくれた。

そこで初めて、私は自分が泣いてることに気づいた。

「あ、ありがとう…」

かわいじてそれだけ言つて、ハンカチを受け取る。

「で、そんなに泣いてどうしたの?」

男の人が私に問い合わせる。

「えつ…と、階でトイレに行つて、出でたら脇へ迷つちやつて…ひつく…それで…えぐ…階を探してたんだけ…ぐずり…」

泣かなじように我慢してたけど、事情を話してると堪えきれなくなつて

「う…うわあああん…お姉ちゃん達とはぐれちゃつて…うう…」

もう大声で泣いてしゃつてた。止めよつても泣くのを止められず、泣き続ける。

「せつか…お~いルカ!メーちゃん!」

男の人は連れの一人を呼んで

「俺達も一緒に探すよ。だからそんなに泣くな」

と言つてくれた。

「うそ…あっがん…」

それからいろいろ歩き回つてみたけどお姉ちゃん達は見つからなくて、もつ歩くのも辛くなつてあた。

「やつぱつと、私のこと置いて帰つちやつたのかな…」

そう呼べと

「そんなことないわよ。監視とコンタクトのことを探してゐるわ」

ヒュンク色の髪をした女人、ルカさんが囁いてくれた。

「やつだな…出るにも入るにもゲートは一つしかないから、ゲート前で待つのが一番確実じゃないか?」

トカイトさんが提案すると

「モーねえ…それがいいんじゃないかい?」

と茶髪の美人、メイコさんが同意した。

「じゃあ決まりだな」

そういうことで、ゲートに向かつて立つた。

30分園内を走り回つたものの、収穫はないに等しく、とりあえ

ず俺は集合場所のゲート前に向かった。

既にミクとレンは合流していたが、レンの姿が見えないので一人とも見つけられなかつたのだろう。

「あ、駿君……やつぱり見つからなかつた？」

「ああ」

俺の答へ//ミクはしょんぼりとした。

「「」めん…私がもつとじっかりしてたら……」

ミクが唇を噛んでそいつこつ。

「きじすんな。これくらい稀にあるだろ?」

そう慰めていふと

「お姉ちやん……」

聞き慣れた元気な声が聞こえてきた。

「コンちやん……」

声を聞いたミクが弾かれたよつてレンに向かつて走り出す。

「「よかつたあ……」「

ミクとレンは抱き合つてそのまましばらく動かなかつた。

ふと見ると少し離れた所にレンがぶつかつた人とその連れが立つ

ていた。

「連れが世話になりました。ありがとうございます」

とつあえず建前上礼をする。

「いやいや、大丈夫だよ」

そう言われたので、頭を上げる。

「あ、紹介するね！」

いつの間にか俺の横に来ていたリンが彼らを紹介してくれた。

一通り、お互の自己紹介が終わつたので俺達は帰ることにした。

ちなみにカイトさん達一行も有賀島町に住んでいるらしいへ帰りは一緒に帰ることにした。

リンとのいきさつを聞き、お礼と謝罪をする。

最もカイトさん達は大丈夫だと笑ってくれたが。

「機会があつたら、今度は俺達も一緒に遊んでいいかな？」

と聞かれたので

「まあ、断られることはないと思ってますよ？」

とだけ返しておいた。

(… そうこうえいば//ミクに出会いから一気に知り合いが増えたな… )

（最近振り返り、そうほんやつと思つた。）

(不思議な奴だな… こいつの周りにはこいつも誰かが集まるんだから

… )

少しだけ、そんなミクがつらやましくなつて、車窓から景色を眺めた。

いつもより、街の光が綺麗に見えた。

## 第9話 鮎とお玉かけ 後編（後書き）

いつもよつよつ長めになりました。

最後の方は駆け足でしたが、

カイト、メイロ、ルカが登場したので、これからはもっと賑やかになるようになります。

登場人物紹介？（前書き）

新メンバーの紹介です

## 登場人物紹介？

ル力達の紹介です。

巡音 ルカ  
(めぐりね るか)

年齢 20才

性別 女

好きなもの

- ・タコ焼き
- ・植物
- ・読書
- ・子供

嫌い(苦手)なもの

- ・ルールを破る人
- ・非常識な人
- ・汚いもの

性格、その他

性格はおつとりとしたもので、基本的に誰と話しても優しい雰囲気を漂わせている。

子供と接することが好きなため、有賀島町にある大学の教育学部に通つており、それなりに忙しい毎日を送っている。

タコ焼きが大好きで、見かけると我を忘れて買いに行くところが

あり、周囲を呆れさせることもしばしば。

プチ潔癖症で、ゴミなど汚れたものを触ることに激しい抵抗を示す。

またルールや約束を守るのはきつい方で、守らない人を嫌う傾向がある。

ミクやリンとは姉妹のような関係であると共に、相談役にもなっている。

巡音 メイコ

(めぐりね めいこ)

年齢 22才

性別 女

好きなもの

- ・酒全般
- ・騒ぐこと
- ・犬、猫

嫌い（苦手）なもの

- ・静かなところ
- ・暗い雰囲気
- ・貧乏くさいこと

性格、その他

直接血の繋がりはないが、ルカの姉。

もともと巡音家の間ではないが、メイコが生まれる前に父を、メイコが生まれた直後に母を病で失ったため、生前交流の深かつた巡音家に引き取られることになった。

かなりの酒好きで、家にいる時の大半は酒を飲むことが多く、よ

ルカに叱られている。

最も、家にいる時だけでなく外食した時も飲みまくるので、酔い潰れてルカに介抱されるのはいつものこと。ちなみにルカもメイコもナイスバディなので、女性にはよく憧れの目で見られる。

始音 カイト

(しおん かいと)

年齢 22才

性別 男

好きなもの

- ・アイス
- ・音楽観賞
- ・ドライブ

嫌い（苦手）なもの

- ・溶けたアイス
- ・辛いもの

・理論的に考える必要のあること

性格、その他

性格はいたつて真面目。

基本的にやらなければならないことはしっかりとこなし、余裕があれば他人を手助けすることもあるので、周囲からの評価も高い。

巡音姉妹とは幼なじみで、小さな頃からよく一緒に遊んだりして

い。

特にメイコとは気が合ひので、よく飲みに行ったりする仲であるが、それ以上にお互いを男女として見始めており、たまに「ちがい」や「取り」をすることがある。

三度の飯よりアイスが好きで、基本的にアイスを片手に持つて行動することが多いが、溶けたアイスは

「溶けたアイスはアイスじゃない！」

と言つておひ嫌つてゐる。

ちなみに何故か暑からうが寒からうがマフラーをしている。

第10話 とある休日にて 前編（前書き）

少し更新遅れました…

# 第10話 とある休日にて 前編

誰かがそれを聞いて突っ込んでくれるわけじゃないけど、 そう大声を出しながら家を飛び出す私。

「あつ、家の鍵閉めないとー！」

家を出て三歩くらいのところで家の鍵を閉めていない」とこくびき、「左回り右をして鍵を閉める。

「どうしよう! 時間まで後20分だよ! 間に合うかなあ・・・」

一人でそんなことを言いながら集会場所に向かって走る。

遊園地に行つてから2週間後・・・今日はリンちゃんとルカお姉ちゃんと私の三人で女子会をやることになつていて、駅前のカフェに1時に集合することになつてたんだけど、昨日、漫画を読むのにな夢中で夜遅くまで起きていたせいなのか、今日起きたのが11時45分だつた。

急いで用意して家を飛び出しだけど、その時にはもう1時40分になつていて集合まで後20分しかなかつた。

(走ればぎりぎり間に合つかなあ……)

そんなことを考えながらカフェに向かつて走る。

いくつもの信号を走り抜け、時には赤信号で待ちながら目的地に

向かつて走り続ける。

「はあっ、はあっ…」

私はもともと運動が得意じゃないから、ちょっと走つただけでも肩で息をしてしちゃうし、靴がお出かけ用のもので走りやすい靴じゃないのも響いてるけど、そんなことを言い訳にして遅刻することはできないから必死に走り続ける。

しばらく走り続けていると、ようやく集合場所のカフェが見えてきた。

息を切らしながら腕時計を見る。

(ま、間に合った…)

時計の針は1~2時5分を指していて、なんとか時間に間に合ひつことが出来た。

「あー、ミクお姉ちゃん」

私が来たことに気づいたリンちゃんが大きな声で私を呼ぶ。隣には優しい笑顔を浮かべたルカお姉ちゃんがいた。

(わかりやすいんだけど、ちょっと恥ずかしいなあ…)

大声を出せば当然周りの人の視線を集めることになるから、それにちょっとだけ恥ずかしさを感じながらリンちゃんの所に向かう。

「『』めんね。待った?」

「ううん。私達も今来たところだよー。」

笑顔でそう答えてくれるリンちゃんを見て、ほつと胸を撫で下ろした。

その時

《ぐうーー》

と、私のお腹がなつてしまつた。

「~~~~つーー！」

声にならない叫びをあげる私を

「あははははーーお姉ちゃん、お腹なつたーー！」

と言つてコンちゃんが笑つた。

「い、いや、これは…そ、その…」

必死にお腹がなつた理由を言い訳しようとするけど、恥ずかしさで頭が真っ白になっちゃつて何も思いつかなかつた。

そんな私を見かねたのか

「ふふつーークちゃん、今日寝坊してお昼まだ食べてないんでしょー？じゃあカフェじゃなくてファミレスにしましょーつか」

と言つた。

そしてそれに便乗するかのよつてコンちゃんが

「じゃあ私、パフェ食べるー！」

と言つたから、私達はカフェの近くにあるファミレスに行くことにした。

今日は昼前になつてから突然隣の部屋が騒がしくなつて、隣のドアが開く音がしたと思つたら

「あつ、家の鍵閉めないと……」

といつミクの声が聞こえ、そのままバタバタとどこかへ走つていつたようだつた。

(そういういや今日女子会やるとか言つてたな……)

昨日の学校の帰りにミクが言つていた事を思い出し、先程起きたことに納得したが

(まあ、俺には関係ないしどうでもいいや)

そつ思つて、ゲームを起動した。

それから1時間余りした頃

《ピンポーン》

と家のチャイムがなつた。

「はーい。今行きまーす

そういつてドアを開けると、そこにはレンがいた。

「よお、レン。どうした?」

そう聞くと

「駿兄ちゃん!僕とゲームで勝負だ!ー」

と、びしつという効果音がつきそうな勢いで俺に向かって指を指してそう言つた。

「…こいぜ、かかつてきな

笑みを浮かべながら俺はそいつてレンを中心に入れた。

「で、レン。なにで勝負するんだ?」

「ん~…じゃあ最初は格ゲーからーーー!」

「へーい

俺はさつきまでやつていたゲームをセーブして電源を切り、レンのリクエスト通り格闘ゲームのカセットに入れ替える。

ちなみに今から使うゲーム機は据え置き型のゲーム機の中ではほぼ一番新しいもので、ネット環境が整つていれば世界中の人たちと

一緒にゲームを遊ぶことができるものだ。もちろんオンラインでの複数人数プレイもカセットによつては今までどおり可能だ。だが、少々値が張るためそう簡単に手出しだできる代物ではない。俺は入学祝で買つてもらえたのだが、どうやらレンはお年玉とずっと貯めてきた貯金を使つてようやく買つたことができたらしく。

「やついいえば今日はお前一人で来たな。リンはどうした? いつも一緒に行動してるとんだとと思ったが?」

やつ聞くと

「コンは今日ミク姉やんとルカ姉ちゃんと女子会だよ」

と返してきた。

「ああ・・・女子会ってそのメンバーか。女子会っていうより姉妹でお出かけつて言つ言い方の方があつてるんじゃないのか? そのメンバー構成だと」

女子会のメンバーを聞いてやつ思つた俺がカセット入れながらレンに向かつて言つと

「確かに。やついう言い方のほうが絶対しっくり来るよね」

とレンも同意した。

「よし、準備できたぜ。ハンティつけるか? レン」

一応確認のため聞いておく。するとレンは

「ハンデ？兄ちゃん僕をなめないほつがい」と細いつぶやく。

と自信たっぷりの返事をしてきた。

「ほり・・・そりゃあ楽しんだ。じゃあお前葉に甘えて本気で行くぜ？」

「やれるもんならせてみるー！」

そしてメニュー画面から対戦を選び、それぞれ使うキャラを選択し次にステージ選択画面になつたが、すかさず俺がランダムを選んだ。

「あつ・・・ちょっとーステージくらいい選ばせてよーーー！」

レンがこいつをこりみながこいつこつてきたが

「ステージなんぞビリも一緒に。気にするなよ

そつこいつを受け流した。

(ま、ステージ」とに若干戦術変わつてくるナビ)

そう思いながらロード画面を眺めた。

《レディー・・・ファイトーーー》

対戦開始のアナウンスが流れる。それと同時に一人の雰囲気が変わる。

対戦が始まると、まずレンは出の早い技を繰り出して来た。

それを横にかわし、こちらも出の早い技で反撃する。

そのままコンボを繋げた時、すかさずレンが防御体勢に入り、こちらの攻撃を全てガードした。

(レンの奴、なかなかやるじゃねえか。こんなに戦えるやつは今までいなかつたぜ・・・だがつ!…)

レンがどの程度の実力を持つているか少し防御に徹して様子を見ていたが、今まで対戦してきた誰よりもうまくなかった実力を持っていたので、少し本気を出すことにした。

俺の攻撃を全てガードしたレンは即座に反撃の体勢に入り攻撃しようとするが、それよりも早くレンの後ろに周り込む。

「しまった！」

そう叫んだレンに構わず怒涛のラッシュを食らわせる。  
そして

『K・O!!』

と画面に表示され、レンのキャラが倒れる。

「クソ〜!! 負けたあ〜!!」

レンが頭を抱えて言つた後

「いい線行つたと思つたんだけどなあ・・・」

と呟いた。

「まあ、中学生にしちゃあなかなかの腕前だったな。でもまだまだ実力不足だな」

そうこうと

「駿兄ちゃんが強すぎるんだよ。これでも僕、近所で一番強いんだよ？」  
ヒレンが言った。

「上には上がいるんだよ。世の中もひとつ強こ連中がいるぜ」

「マジで…？ 駿兄ちゃんでも勝てないような奴らが…？」

驚くヒレン

「ああ。前オンラインでやつたけど何もできずに負けたよ。あれはもう清々しいくらいの完敗だったな」

そう自分の経験を話した。

「世の中にはそんな人がいるんだ…・・・ひょっとやってみたいな

そう呟くヒレン

「やめとけ。いつもそういう実力のある連中とやつても負けるだけであんまり楽しくないと思つね？」

と忠告しておいた。

「アーティスト」

不思議 そんな顔をして「こちらを見返すレン。

「つまい奴らはほんとにつまいからな。流石に一度や一度くらいなら、いが何度も負けると嫌になつてくるぜ？」

「へえ～・・・そ、うなんだ・・・」

少しがつかりした様子のレンに

「ま、今はそんなことより俺との対戦に集中したほうがいいんじゃないか？」

卷之三

「 そ う だ ね ！ ～ ～ ナ ～ し ～ も う 一 回 だ ！ ～

モウレンが語りで、一回戦田を語じめた。

1

●

「あ～おこしかつたあー！」

お皿「はん」を食べたミクちゃんが幸せそうな笑顔でそう言った。

「お姉ちゃんまたネギたま丼だつたね」

ミクちゃんの隣でリンちゃんがそいつった。

「え～だつてネギ大好きなんだもん!」

リンちゃんに向かつてミクちゃんがそいつた後

「ルカお姉ちゃんは好きな食べ物なあに?」

と私に聞いてきた。

「そ'うねえ・・私はたこ焼きが好きだわ」

「へえ～!たこ焼き好きなんだ〜」

リンちゃんが興味津々な顔をしてそいつ言ってから

「私みかんとかオレンジとかが好き〜〜〜」

と皿「アピールをしてきた。

(まだ二)のくらこの年の子供達は可愛げがあつていいわね)

田の前で一人並んで楽しそうに笑い会話をするミクちゃんとリンちゃんを見ながらそいつ思った。

「ところでルカお姉ちゃんは大学でどんなことを勉強しての?」

不意にリンちゃんが聞いてきた。

「私は教育学部にいるの。だから簡単に言えば学校の先生になるた

めの勉強かな」

そう答えると

「へ～！！ルカお姉ちゃん学校の先生になりたいんだ～！す～い！」

と感激したような様子でこちらを見た。

「でも、なかなか大変なのよね・・・人に物を教えるってことは、当然その人たちの知らないことを知つていなくちゃいけないから勉強も今までより大変になるのよ・・・おかげでなかなか休みがなくて」

「へ～・・・高校の勉強も正直結構大変なのに、大学になつたらもつと大変になるんだね・・・」

すこしげんなりとした表情でミクちゃんが言ひ。

「あ、でもね大学は楽しいわよー高校よりもつといろんなところから人が集まつてくるから、面白い人もたくさんいるし、サークルとかもたくさんあつて退屈しないわ」

そういうてあげると

「ほんとー？大学があ・・・行つてみたいなあ・・・」

とミクちゃんが呟いたので

「それなら夏休みとかに来てみるといいわ。高校と同じでオープン

キャンパスとかもやつてるから、一度来て見たらどうかしら？それに都合がつけば研究室や教室には入れてあげられないけど、大学を案内する」ともできるかもしないしね」「

とこつてあげた。すると

「ほんとー？じゃあいつかお願ひしていい？」

と田を輝かせながらミクちゃんが言った。

「ええ！いいわよ。その時は携帯で連絡取り合いましょうね」

「リンも行きたいー！」

「あつらん、リンちゃんも一緒にまいりで」

そんなこんなで、私の大学を案内する約束をした。

「あ、私ジユース持つて来るけど皆何か持つてきてほしいものある？」

やう言つてミクちゃんが席を立つ。

「私、オレンジジユースがいいー！」

「それじゃあ私はウーロン茶を頼もうかしい」

「オッケーー！じゃあ持つて来るねー！」

やうこつてミクちゃんはドリンクバーのまわりに歩いていった。す

るところにちやんが

「ねえねえ、ルカお姉ちゃんは彼氏とかいないの？」

と突然聞いてきた。

「どうしたの？ 突然そんなこと聞いてきて」

質問を質問で返すと

「ううん、別に深い意味はないんだ。でもやっぱり女の子ってそういう会話するでしょ？」

「そうね・・・私はあまりそういう話をしたことはないけれど、そうかもしないわね」

「でしょー！だから教えてよー」

そういって聞いてくるリンちゃんに

「残念だけど、そういう人は私にはいないわ」

と微笑みながら答える。すると

「じゃあじゃあ、好きな人は？」

とさりげなく質問してきた。

「そうね・・・そういう人もいないかな。リンちゃんは？彼氏さんとかはいるの？」

答え、やつ聞き返すと

「私にはレンがいるから大丈夫!...」

と、笑顔でそう答えた。

「あらあら、そつなの~じゃあレン君を大事にしてあげてね?」

「うん!...」

ヤヒコ

「ジュース持つて來たよー」

ジュースを持つてミクちゃんが帰つてきた。

「あー恋愛真つ最中のミクお姉ちゃんだ!...」

そつ茶化すよつてコンちゃんが言つと

「ホーリンちゃん!」ハーハーハの話はやめてよ!...」

そつこいつミクちゃんは顔を真つ赤にしていった。

「ありあり、ミクちゃん、彼氏さんでもいるのかしら?」

「い、いや・・・彼氏はないけど・・・じゃなくて!彼氏もいないし好きな人もいないもん!...」

顔を真っ赤にしてミクちゃんが大声でそう言つたところを

「お姉ちゃん、声大きいよ？周りの人見てるよ？それに思いつきり  
好きな人いるって言つちゃつてるよ？」

とリンちゃんが止めを刺すように言つた。

「~~~~~っ！～～～～」

真っ赤だった顔をさらに赤くして今日一一度目の声にならない叫びを  
あげたミクちゃんだった。

## 第10話 とある休日にて 前編（後書き）

思つたよつ長くなりそうなので前編・後編にしたいと思います。

この先も不定期更新になるかもなので、その辺はよろしくお願いします。

第11話 とある休日にて 後編（前書き）

11話です。

## 第1-1話 とある休日にて 後編

「あはははっ！お姉ちゃんまだ顔真っ赤だ～！」

あたりにリンちゃんのよく通る声が響き渡る。

「う、リンちゃん・・・お願ひだからもうと頬小さくしてよ・・・

」

そう懇願すると

「あっ、『めん』『めん』

セツコヒコソンちゃんは舌をペロリと出した。

「それにしてもミクちゃんは見かけによらず恋ばなが苦手なのね。すぐ顔真っ赤になるもの。私も何度かそういう話はしたことはあるけど、そんなに顔を真っ赤にする人は初めて見たわ」

隣にいるルカお姉ちゃんもくすくす笑いながらセツコ。

「歯の意地悪う・・・私このつ話をしたことないの」「・・・

恥ずかしさで熱く火照った顔を下に向けながら私はそう呟いた。

ファミレスでみんなのジュースを取りにいつて席を離れているうちに恋ばなをしていたリンちゃんに戻つて早々

「あー恋愛真っ最中のミクお姉ちゃんだ……」

と大声で言われてしまい、恥ずかしさで完全に思考が停止しちゃつてそこから今に至るまでの記憶はほとんど思い出せない。分かつているのは今私達はいつも丘の上公園にいることだった。

「この公園に来るまでのことを思い出そうとしても、頭に浮かぶのは駿君のことばかりでその度に顔が火照り頭が真っ白になる。さつきからずっとこの繰り返しだった。

「それにしても、ほんとにいい場所ね。この公園」

顔を真っ赤にしている私の横でルカお姉ちゃんがしみじみと囁く。

「でしょ？私達とミクお姉ちゃん達が出会った場所でもあるんだよー！」

そう白隈げにルカお姉ちゃんに囁くひかりちゃん。

「あら、そうだったの。そつか、ここはあなた達の思い出の場所でもあるのね」

そう私達のほうを向いて微笑みながらルカお姉ちゃんが言った。

「もうだよー！それにここ景色綺麗だから、お姉ちゃん達も、今一度テートコースに使いなよー！」

そうリンドちゃんに言われて、思わず駿君と一緒に並んでここを歩くことを想像してしまい、また顔が火照ってきちゃつけど

（な、並んで歩くことなんて、今まで何回もあつたじゃん…全然恥

ずかしくないよー何考えるんだ？・・・私(

そつそくえて頭を左右に振った。

「・・・ちやんへ//クお姉ちゃん？」

呼ばれてこる」と慌てて返事をする。

「あ・・・え、な、何？リンちゃん」

「何じゃないーわつきから呼んでるのしづと返事してくれないんだもん。さてはまた・・・」

いいかけるリンちゃんを遮りて

「わーっ！…お願い言わないで…！」

と思わず叫んでしまっていた。

「あらあら、そんなに隠そうとしなくていいじゃない。別に近くに人がいるわけじゃないんだし、私はミクちゃんの好きな人を聞いたからって人に言いふらしたりはしないわよ？」

叫んだ私の隣で、ルカお姉ちゃんが微笑みながらそくそく。

「大丈夫だよお姉ちゃん。私だって誰にも言つてないからさ」

慰めてくれているのか、リンちゃんもそくそくしてくれた。でも全然慰めになつてない。

「ねえミクちゃん。よかつたらミクちゃんの好きな人教えてくれない?何かアドバイスしてあげられるかもしないわよ?」

やさしくルカお姉ちゃんがそう言った。

「やうだよー!経験豊富なルカお姉ちゃんにアドバイスしてもらえばいいじゃん!」

リンちゃんもルカお姉ちゃんに便乗してやうこつた。

「うう・・・わ、私は・・・」

そこまで言いかけたけど

「・・・・・やつぱり恥ずかしくて言えないよーーー。」

そういうて顔を伏せた。

「あらあら、じゃあ私の予想をちょっとと言つてみましょーか

そールカお姉ちゃんが言い、そして

「すばり、ミクちゃんは駿君のことが好きなんでしょう?」

とぴつたり当つてきた。

「え・・・あ・・・うん・・・あたり・・・」

一発で当てられたことに対する驚きを抱くどころか、むしろ恥ずかしさが勝つて今日何度目になるか分からぬいけど、まるで顔から

火が出る感じないからこいつらの熱さまで顔が火照った。

「くそー！全然勝てねえ！」

今日何度もかの素晴らしい悔しそうな表情をして、レンが四つ。

「全く・・・何度も言つたら分かるんだ。お前行動パターンが読みやすいんだよ」

そういって俺はコップに入れたジュースを飲み干す。

「えーーーさつきから結構使う技変えたりしてるんだけどなあ」

腕を組んでレンが唸るように言った。

「使う技を変えれば良いってもんじゃないだろ。避けて攻撃、一撃入つたら大技に移る。お前さつきからこれしかやってこねえんだからなあ・・・」

呆れたようにならつた時、俺の携帯がなつた。

「... // クから電話？... もしもし？」

電話に出ると、ややテンパった声の//クが

『あつ...もしもし?駿君?ミクだけど』

と囁いた。

「なんだ？電話するなんて珍しきな。何か急ぎの用でもあるのか？」

『「ひさ。やひじやないけど……実は今から皆で駿君の家に行こうって話になっちゃって……』』

「……もう二つ話をしたらそんな展開になるんだだ……」

『「……でも他にもう行くところが……お願ひでねえ。』』

（やうこやうも一緒に言つてたな。丁度いこや、レンをお持ち帰つしてもらおひ。見送りめんどこし）

「あ、いいよ。ただし菓子やジユースはないから来るなら買つてこい」

やうこ

『ほんと……あつがひとりじゃあ後20分くらいで行くねー』

と喜んだような声を出つて一方的に電話を切られてしまつた。

「……まあ……やひぱつ理解でわざ」

思ひやうわざ

「ほこへ、部屋掃除すつぞ。女子会の姫さんが来るひそかに」とレンは囁いて机に散らかった菓子のパリを拾い始めた。

それから約15分後：

『ピンポーン』

「あ、来たみたいだよ」

家のチャイムがなったので、玄関に向かう。

「へへい」

いいながら、ドアを開けると

「おじやましまあすーーー。」

と言つより早くコンが部屋に入つてこようとした。

「おこりん、お邪魔しますをいえは勝手に入つていわけじやねえぞー。」

そう言つてコンの頭を押さえつけた。

「むわー・・・いいじゃんそれくらー」

頬を膨らませてコンが言つてきたが、スルーした。

「・・・で、ミク」

「はい、はいっ…何?」

いきなり呼ばれて驚いたのか、若干上に飛び跳ねたミクにせつときから疑問に思っていたことを聞く。

「お前らは俺ん家に何しに来た?」

「え? 何って、遊びに来たんだけ? …」

平然と答えるミクに

「…・・・明らかに人数とジュースとか菓子の量が比例してないと  
思うんだが?」

と言った。

ところの、リンは手ぶらだったがミクは両手に袋からあふれそうなくらいこの量の菓子を、ルカさんは両手に一本2リットルは入っているペットボトルをぱつと見6本は持っていたのである。

「え? そりがな?」これくらいないと呪つないと呪つて

ミクが菓子を見ながらさうこのを見て

「…・・・今何時だと思つてる?」

そう質問してみる。

「え? 今は…・・・3時半だね」

腕時計をみながらミクが答えた。

「そうだな。確かにおやつ時だな。でもそんなに食えるわけねえだろー！」

そう突っ込むと

「いいじゃない。食べ切れなかつたら姉さんやカイト兄さんを呼べばいいわ」

トルカさんがわらつととんでもないことを言った。

「・・・ルカさん・・・俺の家はそんなに人数は入れませんよ？見て分かると思いますけど・・・」

そういうてトルカさんの意見を却下しようとするものの

「大丈夫よ。きっと何とかなるわ

と全く根拠のなさそうなことを平氣で言い放つので

（だめだ・・・この人まともかと思つたけど案外適當だ・・・）

そう思いため息をついた。

「やつたーーー！私一番乗りい！」

で、さすがに俺の持つてるゲームでは皆で遊べないので、トランプを引き出しから引っ張り出して皆で大富豪をやっていたのだが

(くそつ…今日はやたらと負けるな…)

さつきからずつと大貧民から抜け出せず、逆にずっとリンが大富豪の座に居座り続けていた。

「リンちゃん強いねえ…」

リンの強さに驚いてしみじみとミクが言つ。

「まあねー!これでも私、中学では幸運の女神って呼ばれてるからさー!」

胸を張つて言つコンに

「あれ?雨女つて呼ばれてなかつたっけ?」

と、すかさずレンが突つ込むが、その後リンの鉄拳制裁を喰らつて倒れた。

「レンは余計なこと言わないでー!」

倒れたレンに少し顔を赤くしながら言つていたリンだったが、俺にはそんなことどうでもよかつた。

さつきから自分だけ負け続けていて、しかもリンばかり勝ち続けていることが気に食わなかつたし、ムカついていたからだ。  
(笛でグルになってイカサマしてんじゃねえのか?)

そう思つことは確實に逆ギレであり自分勝手な考えであることは頭では分かっていたが、あまりに負け続けていたのでそう思わずには

はこられなかつた。

「もつかいやないーー」

そんなことを考えてこる俺の耳にリンの元気な声が響いた。

(「こつ、調子乗りやがつて…）

普通に聞けば一緒にもつ一度やろうと思つよつた声のだらづが、今  
の俺には耳障りな音でしかなかつた。

「俺はバスするわ」

これ以上負けてストレスを溜めたくないし、皆に八つ当たりし  
たりして場の雰囲気を壊したくはなかつたので、そいつて席を離  
れた直後

「えへつ！いーじゃん！もつかいやねつよー

と後ろからリンの声が聞こえた。

「別に俺がいなくても十分人数たりんだる。やるなら俺抜きでやれ

よ

言つた後で自分が明らかに刺のある言ひ方をしたこと気にづいたが、  
訂正しようにも既に遅かつた。

「そんなこきつへ言わなくともいいじゃん！…もしかしてお兄ち  
やん、もつかから負けてばっかりだから嫌になつたんでしょ？」

「なんだと・・・」

リンの的を射た言葉とその挑発的な態度に怒りを爆発させそうになつたものの、かるうじて理性でそれを押さえ込んだ。しかし俺の声は誰が聞いても分かるくらいにいつもよりトーンが低く、怒つていることが丸分かりだった。

「ちよつ、ちよつと二人とも一落ち着いてよーせつかく皆で集まつたんだからさ、楽しく遊ぼうよ。ね？」

リンと俺の一発触発の空氣の中、ミクが慌てて仲裁に入ってきたが今更皆と機嫌よく遊ぶなど到底できなかつたし、そんなことしたくもなかつたので

「そんなに遊びたきや勝手にやつて。俺はやりんぞ」

そういうてその場を離れ、テレビゲームを起動した。その直後

「ちよつ、リ、リンちゃん！それはダメだつて…あつ…！」

ところがミクの慌てた声が聞こえたと思つたら、脳中に何か冷たいものがかかるつた。

「ツー！何すんだー！」

怒鳴りながら振り返ると、そこには怒りで顔を真っ赤にしたリンが立つていて

「最低…！せつかくお姉ちゃんが仲直つさせようとしてくれたのになんなの…？その態度…！」

と怒鳴ってきた。

「うぬせえな……」は俺ん家だ！俺が何しようとも俺の勝手だろ！  
！」

もつこまでされてはこっちも怒りを抑え切れなかつた。  
怒りに任せてリンに怒鳴り返す。

「自分の家だつたらお客に対してもんな態度とつてもいい訳！？あ  
りえないでしょ！！」

「いきなり人ん家押しかけといて何が客だ！！ふざけたこといつて  
んじやねえぞ、このガキ！！」

「私はガキなんかじゃない！！ガキなのはお兄ちゃんの方だよ…！  
それにおちやんとお姉ちゃんが連絡したでしょ…！」

もう一歩も引くことなどできなかつた。こじで負けを認めるのは  
プライドが許さなかつたし、まして相手が年下で、それも女ときた  
ら何があつても引くわけにはいかなかつた。

「家に着く15分前に初めてアポとつといて何言つてんだ！！普通  
そんなことしねえだろ！！礼儀を欠くにもほどがある！そんなこと  
も…・」

そのままリンをたたみかけようとした時

「もうこよ…！」一人とももつやめて…！

とこうミクの悲痛な叫びが聞こえ、俺もリンも硬直した。

「もういいよ…いくら隣に住んでるからっていきなりお邪魔しても大丈夫って思った私がいけなかつたんだよ…」

そういつたミクの声は震えていた。だがさつと家から出て行つてほしい俺は

「ならわざと出でけ。邪魔くせえんだよ」

と心無い言葉を言い放つた。

「ちよっと…」

俺の言葉に一瞬怒りを爆発させそうになつたリンだったが

「リンちゃん。私なら大丈夫だから。今日はもう帰ろ? また皆で遊べばいいんだからや」

ところがミクの言葉に衝撃を受け、黙り込んでしまつた。

「駿君…ごめんね。お邪魔しました…」

そう一言だけ言つて、ミクはリン達を連れて部屋から出て行つた。  
…否。一人だけ玄関で立ち止まつていた。

「駿君。あなた自分が何をしているか、分かつてる?」

玄関にいたのはルカさんだつた。

「ちよ…お説教なら聞きますよ。早く出でつてください」

説教など聞きたくもないのをついついルカさんを追い払おうとした。

「そり…でもひとつだけ言わせてもらひつわ。あなた、今ままだと友達いなくなるわよ」

「結構だね。友達なんて必要ない」

「そり。余計なお世話だったみたいね。じゃあ、さよなら」

そういつてルカさんも部屋から出て行った。

(どういつも同じいつも…だから人と付き合つのは嫌いなんだ)

改めて、自分は一人でいることのほうが好きだということを実感した。だが

(あなた、今ままだと友達いなくなるわよ)

といつるカさんの言葉が頭から離れなかつた。

(…俺が友達を欲しているとでも？馬鹿馬鹿しい、そんなことあるわけねえだろ)

忘れようとしても、頭から離れないその言葉とあの時のルカさんの顔を思い出し、腹立ち紛れに「ミニ箱を思いつき蹴飛ばした。

そしてイライラしながらミクたちが食べ散らかしてそのままにしていった菓子の残骸と蹴飛ばして散らかつた「ミニ箱」付けに取り掛かつた。

## 第1-1話 とある休日にて 後編（後書き）

なんとか更新出来た…

今後の更新予定については活動報告の欄を一覧べださい。

## 第1-2話 ルカの悩み（繪書き）

結局我慢できず書きましたww

でもいつもより1500字程度少なめで短いです。  
テスト終わるまで多分こんな感じになると感にます。

## 第1-2話 ルカの悩み

「じゃあ、今日は」これで終わりでいいや。司令

『さよなら～』

生徒達が挨拶をし終わると同時に、それぞれの行動を取りはじめた。

部活に行く者、家に帰る者、残って勉強していく者。皆様々に動く。そんな中、一人だけ様子の違う者がいた。

「…ミク殿？ どうしたでござれるか？」

拙者が声をかけたのはいつもは明るく元気に振る舞つて他の者からも好かれていたミク殿だった。

「あ…ガクポ先生…」

そう返事してこちらを見たミク殿の顔は普段の彼女とは似ても似つかぬ程暗い表情をしていた。

「何か悩みでもあるのでござれるか？ 拙者で良ければ相談に乗るでござるよ」

と声をかけるものの

「いえ…大丈夫です。悩んでる訳じゃなくて、ちょっと疲れ気味なだけですから…」

そういうてかばんを持って教室から出てしまった。

「はて… 一体彼女に何が…」

とぼとぼと廊下を歩くハク殿の背中を見送りながら、拙者は一言呟いた。

「ガクポ先生、今日もお疲れ様でした」

「おひ? ハク先生。先生も今から帰りでござるか?」

一日の仕事を終え、職員室から出ようとした拙者にハク先生が声をかけてきた。

「はい。私も今仕事が終わつたところです」

「やうでござるか。なら今口はちょっと一杯飲みに行かぬか?」

「あら、いいですね。行きましょうか」

「こうことで拙者達はいつも行つている馴染みの居酒屋に向かって歩き出した。

「そろそろ新年度が始まつて二ヶ月が経ちますね。ガクポ先生は生徒達と仲良くなれましたか?」

駅の近くに来た時、唐突にハク先生が聞いてきた。

「うんにゃへ~じゅで~じゅるかな…まだあまり話したことのない生徒  
もこ~るから、まだまだで~じゅるよ」

「やうですか…私もなかなか皆の名前覚えられなくて、良く間違え  
ちゃうんです。…ああ、やっぱり私は教師に向いてないのかな…グ  
ズッ…」

「ハク先生、お、落ち着くで~じゅるよー。」

半泣きになってしまったハク先生を慌ててなだめる。  
この先生、とても良い先生なのでじゅるが些細なことすぐに物  
事を悪い方向に考え、泣き出す上に酒に逃げやすいといつも少々困っ  
たところがある先生であった。

「うー…私はどうせお前も覚えられないダメな教師なんだ…」

(參ったの…いつものことではあるが、やはり泣かれてしまうとな  
…)

そんなことを考え、何か良いものはないかと辺りを見回していると

(おひ?あれは…)

右方向に見覚えのあるピンク色の髪をした女性がいた。

「おお~い!ルカ殿ではないか!~!」

拙者の目線の先にいたのは、かつて卒業した大学を訪れた時に仲良

くなつたルカ殿だつた。

「あ…ガクボ先輩…」

(おひおひヘルカ殿も凹んでおるな…)

拙者にござついたルカ殿であつたが、どいつも何か凶んでこるよつだつた。

「どひしたでござるか? 隨分凶んでこるよつだが…」

そつ拙者が問ひと

「あ…いえ…」

と口元をつてしまつた。

「まあ、一緒に酒でも飲まぬか? たまには良こだらう?」

「でも私、お酒は…」

「良いではないか。そんなにたくさん飲めと申してゐ訳ではない。  
それに、酒も適量ならすつきつするしの」

そつ誘ひと

「あ…じゃあひよつだけ…」

と言つてくれたので

「では行ひつか。ハク先生、行くでござるよ」

「えぐひ…せー…」

そして拙者達は居酒屋に入つてこつた。

「で、何を説いてるの？」

居酒屋に入つてしまふとした頃、それとなくルカ殿に聞いて見ると、ちなみにハク先生はやらないではならぬ仕事を思い出したと言つてタクシーで先に帰つてしまつた。

ルカ殿はちょっとだけ、と言つていた通り拙者に比べれば半分にもならぬ量しか飲んでいなかつたが、それでも少し酔いの回つたのかぽつりぽつりと語り始めた。

「私、今、年下の女の子達と仲良くしてゐるんですけど、あ、別に小学生とか幼稚園生とかじやなくて中学一年生と高校一年生の子達で名前はリンちゃんとミクちゃんって言つんんですけど…」

「そういえばルカ殿は子供が大好きであったな?」

おちよこじに酒を注ぎ、酒を口にしながらさう聞くと

「はい…それでその子達との間遊んだ時にミクちゃんの友達の家に行こうって話になつて…」

そういうてからルカ殿は酒を飲み干した。

「…その家の家で何かあつたので、なぜか?」

ところづきの間にルカ殿は頷いた。

「…最初は皆で楽しく遊んでたんです。でも途中からその友達が不機嫌になつてきちゃつて。でも彼は彼なりに気を利かせたつもりだつたんだと思つんですね」

「ところで、

「トランプで遊んでたんですけど、その子ばっかり負けてて流石にイライラしてたみたいなんですね。だから監に迷惑かけないようついでに席を離れようとしてたんだと思つんですね」

拙者は領き先を促す。

「でもリンちゃんが一緒にやかまつて言つたんです。…実は彼がずっと負けてる間、逆にずっとリンちゃんが勝つてたんですよ。だからさうと力ちんときたのか彼、きつく言つちやつたんですね」

「わたくしは、どんな風に言つたの？」

少し気になつたので聞いてみると

「えつと…俺がいなくても十分人数たりんだろ。やるなら俺抜きでやれよ、って冷たく言つたんですね」

「やつでいるか…それで？」

そつ拙者が促すと、また酒を少しおこしながら

「そしたら、彼の返事に力ちんときたリンちゃんが、もしかしてず

つと負けたから嫌になつたんでしょう？って挑発しちやつて……」

(句となく読めたで「じわるな……」)

「それで、売り言葉に買ひ言葉で喧嘩になつたの？」じわるか？」

拙者の門にルカ殿は

「ちよつと違うんです。まあ結局は喧嘩したんですけど、その時  
点でリクちゃんが止めようとしたんです」

「おひ、やうであつたか」

「はい……でもリクちゃんの言葉に彼は耳を貸さなかつたんです。そ  
れでリクちゃんが完全に怒つちやつて……」

「やうか……」

まあ、今までの状況は大体理解出来たのだが、何故それでルカ殿  
が悩んでこらのか拙者にはまだ分からなかつた。

「それで、喧嘩になつたので「じわるか？」

「はい……でもリクちゃんも男の子の方も凄い剣幕で喧嘩してて私、  
止められなかつたんです……」

やつこつてルカ殿は再び酒を飲んだ。

「それで、止められなかつた自分が不甲斐なくて悩んでおつたのか

？」

拙者の問いにルカ殿は

「それもありますけど、その後あつたことの方が悩みの種なんです  
…」

「と申すと？」

「結局、ミクちゃんが止めたんです。…私が悪かったんだって言って…でも彼は、すごく冷たい言葉を言って…それで私も頭にきちゃつて帰る時に、あなた友達いなくなるわよって思わずひどいこと言つてしまつたんですね…」

そこまで言つとルカ殿は大きなため息をつき

「…ガクポ先輩、私自信ないんです。ミクちゃんにあんな冷たい言葉を言つた彼も悪いけど、自分の感情をコントロールできないで私、彼にひどいこと言つて…こんなことで教師になれるのか、不安なんですね…」

そうつづて再びため息をついた。

「そういうことであつたか…」

ようやく、ルカ殿の悩み事がなんであるかわかつた。

「案ずることはない。おぬしもその友達も皆人間だ。誰しも間違いは犯すものでござるよ。大切なのはその過ちを次に活かそうとするかどうかではないのか？大丈夫でござる。ルカ殿ならきっと良い教

師になれるで」「やねえよ」

そうこうした拙者にルカ殿は

「…ありがとうございます。私、もう一度頑張ってみます…」

と笑顔を見せてくれた。

「うむ。頑張るで」「やるよ。といひでわざと聞いていた、えへつと…誰だつたかな？ルカ殿の高校生の友の名は」

「初音ミクちゃんですか？」

「そつそつ。ミク殿で……つてミク殿だと…？」

今更ながらその名前を聞き驚いた。

「え…先輩、ミクちゃん知ってるんですか？」

向こうも驚いた様子でこちらを見た。

「知ってるも何も、ミク殿は拙者の担任しているクラスの生徒でござるよ。ところとは友の名は天川駿でござるな？」

「え、ええ…驚いたわ…先輩の生徒だったなんて…」

「拙者もでござるよ。偶然なのか必然なのか…まあ、二人には後で話を聞いてみるとするでござるよ。…さて、遅くなってしまったな。帰るしようか？」

そういうて拙者達は居酒屋を後にし、ルカ殿とは駅で別れた。

(…「これはなかなか難しい問題やもしれんの…」)

ひとり、そんなことを考えながら拙者も家路に着いた。

## 第1-2話 ルカの悩み（後書き）

読者の方に「ガクポ視点を見てみたい」とリクエストしていただき  
たので、書いてみました。

これから何話かガクポを出す予定です。

テスト勉強なんてなかつた！キリッ

## 第1-3話 友達の定義（前書き）

テストが終わりました。悪い意味で

ということです。13話です。ちょっと短いです。

## 第1-3話 友達の定義

「はあ……」

私は今日何度目かのため息をついた。

(…駿君、まだ怒ってるんだろうなあ…)

ため息の理由、それは駿君とのことだった。

(許して…くれないよね…駿君の言う通り、行く直前になつて遊びに行つていいか聞くなんて非常識だよね…)

数日前、女子会の流れで駿君のお家に行こうつて話になつたのはよかつたんだけど、そこでリンちゃんと駿君が喧嘩し始めちやつて私がなんとか止めたんだけど、駿君は完全に怒つて…それから最近はずつと口を利いてくれないし、登下校も別々になつちゃつてた。

「はあ……」

そつと、隣の席を横目で見る。  
駿君は耳にイヤホンをつけて曲を聞きながら、机に突つ伏して寝ていた。

「ミクちゃん?…どうしたの?」

視線を前に戻し再び俯いていると、突然声をかけられた。

「えつ……あ、紅葉ちゃん……」

私に声をかけてくれたのは白河 紅葉ちゃんだった。

駿君の他にこの学校で仲良くなつた友達で、いつも一緒にお昼ご飯を食べたりしてゐる。

「何か最近ミクちゃん元気ないみたいだけど、嫌なことでもあったの?」

心配そうな目で私の顔を覗きこみながら紅葉ちゃんが聞いてきた。

「あ……ひつと!大丈夫。最近ちょっと疲れ気味でさ。五月病つてやつかな?」

紅葉ちゃんにだつたら本当のこと話を相談するのもいいかもしないけど、これは自分が起こした問題だから紅葉ちゃんを巻き込んで彼女に余計な心配はかけたくなかつた。

「…そ、う、な、ら、い、い、け、ど…何かあつたら相談してね?力になれるかもしれないし」

正直、こいつことを言つてくれてすごく嬉しい。でも、その優しさがいつまで続くのだろう、と考えると

(…あまり仲良くなり過ぎない方がいいのかな…)

つて思わずにはこられなかつた。

(私の秘密を知つたら、仲良くなしてくれないよね…)

誰にも言えない私の秘密。

今はこいつして普通の公立高校に通っているけれど、本当だつたら  
もつと別の高校につっていたはずだつた。

そう、皆が俗に言つ「お金持ち」の人人が通う高校に…

でも私はそれが嫌だつたから無理を言つて普通の高校に通わせて  
もらつことにした。

それでもやつぱり不安は拭えなかつた。私の秘密を知つた皆が私  
から離れて行くんぢやないかつて、また中学生の時と同じことにな  
つちやうんじやないかつて、不安にならざにはいられなかつた。

「… //クちゃん? 大丈夫?」

名前を呼ばれたことに気づき、はつと我に帰る。

「あ…紅葉ちゃん…どうしたの?」

そう質問した私に紅葉ちゃんは

「どうしたの? じゃないよ。またぼーっとしちゃつてや。ほんとに  
大丈夫なの?」

と言つて心配そうな目で私の方を見てきた。だから

「大丈夫だよ」

と言つて私は笑つた。

でも

「… //クちゃん、嘘つくの下手くそだね。全然大丈夫そうな顔して

ないよ？いかにも悩み事があるって顔してゐる

つて言われた。

「え…そんな分かりやすい顔してん？」

そう聞くと

「うん。だつて半分泣きそうな顔してんもん」

と返された。

「え…？」

そんな酷い顔をしているのかと思い、手鏡を取り出して自分の顔を見てみると、そこには確かに泣きそうな私が写っていた。

「あ、ほんとだ…酷い顔だね」

「だから言つたじゃん…

…そんなに辛いことなら一人で抱え込まないで、相談してね？私達、友達でしょ？」

「友達」。その言葉を聞いてふと気になつた事があつた。

「ねえ紅葉ちゃん。友達ってなんなのかな？」

私の突然の質問に、惑いを見せた紅葉ちゃんは

「え…友達って何つて聞かれてもなあ…」

と困ったような表情をしちゃつたから

「あっ……」めんね。急に変なこと聞いて

そうじつて慌てて謝った。

「ううん。大丈夫だよ。でも聞かれると意外と答えられないんだね」

「わうだね……」

そんな会話をしているうちに、授業の始まりを告げるチャイムがなつた。

(…友達って、本当にどういう存在の人のことをいつのかな…)

ほんやうとそんなことを考えながら、私は授業の用意をした。

・  
・  
・  
・

今日も無事に一日が終わり、帰りのホームルームも終わった。生徒達はいつものように部活に行ったり、家に帰るとしていたりといつもと変わらない様子であった。

拙者は意を決して一人の生徒に近寄った。

「ミク殿？少し良いでござるか？」

拙者が声をかけた生徒は、先日ルカ殿との話題の中に出てきた生

徒だった。

「あ…がくぼ先生…大丈夫ですよ?」

「そうじ『』やるか。なら少しばかり話したいことがあるのにな。ちよつとつこして来てもらえぬか?」

「え…まあ、いいですけど…」

少しだけ怪訝そうな表情をしたが、ミク殿は素直についてくれた。

拙者達は職員室近くの面談室に入り、お互に向き合つてよつた形で座つた。

「…話つてなんですか?」

座つてから先に口を開いたのはミク殿だった。

「…単刀直入に申そう。最近ミク殿を見ていてかなり深刻な悩み事があるように見えるので『』やるよ。拙者は担任で『』やるから、生徒の悩み」とは一緒に解決しようという志を持ってくるゆえ、少々迷惑かもしからんがこうして来てもらつた訳で『』やる」

そういうふた拙者に対しミク殿は

「…ですか…でも先生、私そんな大層な悩み事はないんですよ?だから…大丈夫です」

ミク殿はそういう拙者に笑顔を見せようとしたりう。笑つてはいたが、その目には涙が溜まつていた。

「…//ク殿はあまり嘘をつするのが上手でないよつド」  
「わるな」

「え…？」

「目に涙が溜まつておるよ」

拙者がやつこいつと

「えつ…嘘…」

と驚いた表情をして慌てて目を拭つた。

「…でも、そんなに大したことじやないんです。ちょっとつらいやつて思ひ」ともあるけど…」

拙者に指摘されてもなお、大したことがないと言ひ張りつとしていたが

「ほんと、」大したことじゃないんで…す

堪え切れなくなつたのか、ボロボロと涙をこぼし始めた。

「…事情は、大体聞いてあるよ。天川と揉めてしまつたよつド」  
「わるな？」

「どいでそれを…？」

「巡音ルカ殿は知つておるな？彼女は拙者の後輩なので」  
「わるなよ。」  
「あいだ偶然ルカ殿に会つての。そこで聞かせてもらつた」

「そうですか……」

「……」

「……」

しばしの間、沈黙が流れ。ミク殿はしばらく下に向いて黙り込んでいたが、少しだけ顔を上げて拙者に質問をしてきた。

「……先生、友達ってなんですか?」

「……」

予想外の質問に拙者は驚き言葉が出なかつた。

「私、駿君とは友達だと思つてたんですけど、でも、駿君はそう思つてなかつたのかなつて……私は駿君にとつてただ面倒くさいだけの隣人だつたのかなつて……」

そういうつてミク殿は再び下に向いて涙を流し始めた。

「……友とはいつたい何か、か

(そういえば昔、拙者も同じことを考えたな)

かつて拙者も親しいと思つていた友とちょっとしたことで大喧嘩をし、その時の拙者も友とは一体何なのか、しばらぐの間ずっと考えていた時期があった。

( 人ならきっと一度は思つことなのだろうな… )

目の前でかつての自分と同じ疑問を抱いているミク殿を見て、しみじみとそう思った。

「私、分からんんです。友達ってどういう関係の人のことを言つりですか？」

泣きながらそう問つてきたミク殿に、拙者はかつての自分を重ねながらこうこつた。

「友という存在に、どうもへつたれもないでござるよ。別にいつも一緒にいるから友というわけでも、よく遊ぶから友というわけでもなかろう? …強いて言つなら、互いに互いを大切に思えればいつも一緒に遊んだりしなくても良いのではないか? それに…」

「それに?」

「友だから喧嘩をしないなんてことは、ないのでござるよ。むしろ、喧嘩をして互いの思いをぶつけ合つて初めて分かりあえることもあるからの。別に喧嘩をしたからとか、ちょっと意見が食い違つたりしたくらいで、そんなに心配することもないのではないか?」

かつて拙者が出した答をミク殿に伝える。それでも、ミク殿の表情が明るくなることはなかった。

「…でも駿君は、友達なんか要らないって…」

「…そりゃ…だが、天川は本当は友達が欲しいのではないか?」

「…え？」

拙者の言葉にミク殿は思わず驚きの声を上げた。

「駿君が…友達を欲しがってる?」

「左様。これはあくまで拙者の推測に過ぎぬから当たつていいかはわからぬが、恐らく天川は今まで友と呼べるものがほとんどいなかつたのではないだろうか。仮に友と呼べるもののがいても、皆彼の元から離れていつてしまつたのだろう。だから他人を遠ざけて、友を作らぬよつしているのでは、じざりんか?自分の元からともが離れる悲しみや辛さから逃れるために」

「ほんとにそうでしょうか?」

信じられないといった表情でミク殿はそう聞いて返してきた。

「どうでござれるかな?違つかもしれぬが、拙者が見ている限りではそうではないかと思ひでござれる」

そう答えた拙者にミク殿は

「…分かりました。私、もう一度がんばって駿君に声をかけてみようと思います」

といつて笑顔を見せた。

「つむ。がんばるでござれるよ。さて随分と時間が経つてしまつたな…氣をつけて帰るでござれるよ」

「はい。さよなら先生」

そうこうで帰るミク殿を見送りながら

(ミク殿…がんばるだいれるよ)

と心中でもう一度声援を送り、職員室に戻つて残りの仕事を片付けることにした。

## 第1-3話 友達の定義（後書き）

最近じうも調子が悪い…

ねたは浮かぶんですけど、文章につまくかけなくて…小説つてやつぱり難しい…

第14話 ミクの想い、駿の想い 前編（前書き）

14話です

## 第14話 ミクの想い、駿の想い 前編

6月10日、木曜日。

学校の授業が全て終わり、ホームルームも終わったので俺はすぐに家に帰る準備を済ませ、教室を出た。

(…やつと木曜まで終わつたぜ…これで後は金曜日をやり過ぐすだけだな)

そんなことを考えながら、校門を出て家に向かつて歩く。  
…ちなみに最近はミクと一緒にではなくずっと一人で上下校をしている。

(あいつもその方がいいだろ。俺みたいな奴なんかよりも他の連中といた方が楽しいだろうし)

ミクはどうであれ、少なくとも俺はそう思つてるので特に一人で上下校することに躊躇いは感じなかつた。

(それに、正直いな方があが楽だし)

そう思つてたが、ふと心の隅で何とも言えないモヤモヤしたものがあることに気づいた。

(…別に俺は何も間違つたことしてねえだろ。なのになんでこんなにスッキリしねえんだ?)

理由の分からぬことを考えていても仕方ないのは分かつていたから、気にしないように努力したが、それでも心の中のモヤモヤした

ものが気になつた。

(あやか、友達なんて要らないって自分で言つとこで実は違うとか  
?ふん… 馬鹿馬鹿しい。そんなことあるわけねえだろ… あーあ、下  
りでないと考えあつた。わかつて帰つてゲームするか…)

そんなことを考えながら家まであと少しのところまで歩ってきた  
時、ぽつつ、ぽつつと雪が降り出した。

(ちつ… 極限ついたな。少し急ぐか)

本降りになる前に家に歸るひび、俺は走り出した。

(結局、今日も話しかけられなかつたな…)

がくほ先生と話してから三日。ずっと駿君に話しかけよつとした  
けど、これ話しかけよつとするとなんだか氣まずくて話しかけられ  
なかつたり、駿君がどこかにこつちやつたりして話しかかれずに  
いた。そんなことをしてこの内に気がついたらもう三日も過ぎてい  
た。

(…どうしたらいいんだろ?。でも、せめてちやんといの間のひと  
は謝りなことな…)

ずっと心の悪ひでこらねたび、いつも話しかけられなかつた。

「//かわやん。一緒に帰る?」

ぼんやりとしている私に紅葉ちゃんが声をかけてきた。

「あ、うんー帰ろつか?」

そう返事をして、私たちは教室を出た。

昇降口に向かつて歩いている時、急に後ろから

「あ、初音さーん

とこいつ私の名前を呼ぶ声が聞こえた。

「はい?」

返事をしながら後ろを振り返ると、そこには見慣れない男の子が立っていた。

「初音ミクさんですね?僕、黒田 賢児くろだ けんじっていうのです!…いやあ、お会いできて光榮ですよ!」

「はあ…」

全く見知らぬ人に突然声をかけられ、しかもフルネームまで知られていて何が起こっているのか分からず混乱していると

「ミクちゃん、知り合い?」

と横で紅葉ちゃんがささやいた。

「ううん。知らない人」

そう返すと黒田と名乗った男の子が

「まあ、知らなくて当然ですよね」

といつて私に何かを差し出してきた。

「…? なにこれ?」

差し出されたのはどこかの会社の社員証のようなカードだった。よく見ると、いつだか忘れたけど見たことのあるマークがプリントされていた。

「……」「これ……」

一緒に見ていた紅葉ちゃんが驚いた表情をして私のほうを向いて

「これ、あの有名な黒田財閥のマークだよー。」

と言った。

「じゃあ、あなたは……」

そのカードから田の前にいる男の子に視線を向け、やけにうつ

「はい。黒田財閥の御曹司つてことはですかね。まあ、俗に云つてぬ  
坊ちやまつてやつです」

とにかく笑顔を見せながら返事をした。

(財閥の息子!…だから私の名前を…  
「うしょー…」のままだと私の秘密が…)

田の前にいる人が有名財閥の息子だとすれば、当然私のことも知つていておかしくない。

黒田君のように堂々と教えたりしないで眞には秘密にしていろナゾ、私も彼と同じ有名財閥の娘だから…でもここでもそのことを話されてしまえばいくら紅葉ちゃんでも誰かに話してしまはうだらうし、なによりそれを知った眞が私から離れていくのが嫌だった。

「「」あんなさい。私ちょっと今日は急ぎの用事があるから…さよならー。」

そう黒田君に向かつてそうこうと、私は紅葉ちゃんの手を引っ張つて逃げるようになんの場を去つた。

「…いつまでも隠せるとは思わないんですけどね。初音財閥の令嬢さん」「

ミク達が去つた後、そう静かに黒田は呟いた。

「ちよつと一ビハしたのミクちゃん?そんなに逃げるよつな」と  
なくたつていじやん!折角すい人に声かけてもらえたのに…」

昇降口を出て、校門に向かつて歩いていく最中に紅葉ひやんが私に向かつてそういうた。

「「めんね……でも私、ああいう人苦手なんだ」

そう謝ると

「いいけどさ。……でも、お金持ちの人ってほんとなんか違うよね？  
雰囲気とこつかなんといつかその辺がさ」

と同意を求められたから

「わづだね……」

とだけ返事をした。

そんなことを話しながら校門を出た時、雨が降り出した。

「つわづー・翌降つておひやつたーー!! クリケンまたねーーー」

「うんー・また明日ーーー」

お互にしゃべりながら、反対方向に向かつて走り出した。

(もう…折り畳み傘くらに持つて置けばよかつたな…)

心の中で後悔するものの、傘も何も持っていないので仕方なく鞄を頭の上に乗せて手で押されながら翌日またなによじて家に向かつて走った。

・

家に着いた頃にはもう全身ずぶ濡れになっちゃって、とりあえず軽く水を玄関の外で払つて家に入った。

(…それにしてもあの黒田つて人…厄介だなあ…)

濡れてしまつた制服をハンガーにかけて干しながらそんなことを考えた。

(変に出くわして、秘密をばらされないようこしなことな…)

まさか、同じ学校に私と同じような有名財閥の子供がいるとは思わなかつた。

(もし私の秘密がばらされちゃつたら…皆は私をどんな風に見るんだわう?)

また一つ、悩み事が増えてしまつた。

(駿君とも友達でいたいしどうしたらいいの?)

そんなことを考えてたら、胸が締め付けられた。

(…寝よう。今日は疲れちゃつた…)

そう思い、髪だけ乾かして寝間着に着替えると、すぐベッドに倒れ込んで寝てしまった。

「ん…寒い…」

急に寒気を感じて、私は目を覚ました。

「うう…なんか頭がぼ～っとする…」

とりあえず何か飲もうと体を起し、起き起きと頭が痛んだ。

(…やだ、風邪引いたかな…)

足を踏み出す度に頭が痛み、ふらふらしたからキッチンに行くのも一苦労だった。

何とかキッチンにたどり着き水を飲んだけど、全然楽にならなかつた。だから、とりあえず熱を計ることにした。

.

◆◆◆◆◆  
◆◆◆◆◆

「…うわ」

体温計が示した温度は38・3度だった。

「…今何時だつけ?」

起きた直後からずっと頭痛と寒気を感じてて、時計を確認するのを忘れてたから、今が何時なのか見るために壁に掛けてある時計に目を向けた。

「…あれ?もう日付変わってる…」

時計は6月11日午前3時を示していた。

(…帰ってきてからずっと寝たんだ…)

じゅうやう、私は夕飯も食べずにずっと寝ていたみたいだった。でも、だからといって特に腹がすいている訳でもなかつた。

(…今から寝たら熱下がるかな?)

そう思って、私はもう一度寝ることにした。

.

.

.

.

ビーッ…  
ビーッ…

「んあ?ああ、もう朝か…」

田覚まし時計を止め、俺はベットから起き出した。

(今日も学校か…めんどくせえな…)

朝飯の食パンをかじりながら、そんなことを考える。

(ま、今日が終われば土日で学校休みになるから…)

そつね思つてもやけり面倒くさることは面倒くさい。だらだらと準備をすること、8時になつていて。

「うわー……遅刻する……」

慌てて準備を終わらせ、家を飛び出す。自転車は引っ越してくる前にリサイクルショップに売り出して自分の小遣いにしてしまったので、持っていない。つまり学校まで走らなければならなかつた。

（走ることなんざ中学以来だぜ……）

中学時代、唯一といつてもいい最高の思い出を思い出しながら、俺は学校へダッシュした。

全力で走つたことが功を奏したのか、何とか遅刻することはなかつた。息を切らしながら教室に入り自分の席に座る。すると誰かが俺に話しかけてきた。

「天川君、ミクちゃん知らない？」

話しかけてきたのは、クラスの女子だった。確かにミクと一緒に飯を食つてた奴で、ミクには「紅葉ちゃん」と呼ばれていた奴だと思う。苗字は……俺の記憶が正しければ白河、だつた気がする。

「あ？ 知らねえよ。どうせ寝坊だろ」

いくら一時期一緒に登下校をしていたからといって、何でもミクの連絡が俺に来ると思い込むのはやめてもらつたかった。だから、適当にそう返事をしておいた。

「寝坊かなあ？違つと思ひナビ

わつわといなくなれば良いと思つて返事したのが、予想に反して相手が言い返してきたこと」イリツキ

「ちつ…知らねえつてんだろ。そんなにミクが心配なら電話でもすりやあいにだらうが」

と言つて放つた。そして言つた直後にまた言つ過ぎたことに気づいた。

（…また逆切れされんだろうな…）

俺の予想通り、白河は

「ちよつと…そんな言い方ないでしょ…？天川君はミクちゃんの友達じゃないの？！」

と俺に向かつて怒鳴つてきた。

「知るかそんなの！大体なんでちよつと登下校を一緒にしてただけで友達になるんだよ？俺はあいつの友達になつたつもりなんてねえし、あいつだつて俺のことを友達と見てるわけねえだら…」

学校に来て早々、ミクの話題を出されてイラついていたことに加え、白河の「友達じゃないの？」的な発言に思わず頭に来てしまい、怒鳴り返す。

「なんですか…！」

白河がまた何か怒鳴り散らそうとした時、教室に侍担任が入ってきた。

「おひ? 今日は朝から随分と修羅場でござるな?」

「……が、がくぽ先生……」

白河が侍担任が来たことに驚き硬直する。

「何があつてそんな言い争いをしていたのか、拙者に教えてくれぬか?」

いつも通りの優しそうに見える笑顔を浮かべながら、がくぽ先生が俺達に聞いてきた。

「別に……大した事じゃないです。それに喧嘩の一矢一矢へり一矢へりでついてことないでしょ?」

教師まで絡んでくるとなおさら厄介なことになりかねないので、そういうふうにしてこの話題を終わりにしようと困ったのだが

「喧嘩は良くないでござるよ。それにお互いに気まずこまま終わらせめるよりちゃんと謝つてしまふべきだと終わらせたほうが良いのではないか?」

と、やたら教師面して首を突っ込んだがるので、何か言い返さうと口を開いた時

「先生、ミクちゃん、今日学校休むって連絡は言つてますか?」

と白河が横槍を入れてきやがつた。

「ミク殿でござるか？今日は風邪で欠席するといつ連絡が来ておるが…それがどうかしたのでござるのか？」

「いえ…こつももつ学校に来てるのに、今日は来てないから…」

「う…白河が言つと、がくぼ先生は

「なるほど、読めたでござるよ。おぬし達ミク殿のことで揉めてたのござるな？」

とドヤ顔をして俺達に言つてきた。

「あ…まあ、そんなとこです…」

白河が俯きながらそう答える。それに対してもがくぼ先生は「そんなに心配しなくとも、ミク殿なら月曜日にはちゃんと学校に来れるでござるよ」

とまたも優しくて見える笑顔で白河に言つた。

「でも…」

それでも暗に表情の白河に向かつて先生は

「大丈夫でござるよ。それに、紅葉殿のそんなくらい顔をミク殿が見たらきっと心配してしまつでござるよ」

とにかくにも決め台詞的な感じで言った。

(…茶番だな…くつだらね&)

まるでどこの漫画の世界にありそうなシチュエーションに呆れながら椅子にふんぞり返った。

「さて、ホームルームを始めたばかりのよ。皆の着、着席するド！」  
やめ

IJについて、今週最後のめんべくIJK学校が始まった。

(…友達だと? そんなくだらない存在作ってなんになる? くだらね  
…)

IJの前の女子会(笑)の連中が来た時のルカさんの言つたことやわざ白河に言われた「友達」という言葉が頭から離れず、無性にいろいろしながらホームルームを廻りした。

(俺に友達なんて必要ない。作ったって、どうせ皆俺から離れていくのが関の山だ。なら作る必要なんてねえだろ?)

やつ思い、やつやといJの事を忘れようとしたらそれでも忘れることができなかつた。

## 第14話 ミクの想い、駿の想い 前編（後書き）

気がついたらユニークアクセスが600を超えていました。皆さんいつも読んでくださりありがとうございますーー！これからもがんばって書いていこうと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5346x/>

---

そよ風に歌声を乗せて

2011年11月26日17時56分発行